

研 究 紀 要

第 4 号

1988

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

神子柴文化をめぐる諸問題

——先土器・縄文の画期をめぐる問題(一)——

栗島義明……1

縄文時代の土偶装飾をもつ土器について

浜野美代子……93

北武藏における古瓦の基礎的研究II

昼間孝志・宮 昌之

木戸春夫・赤熊浩一……109

関東における中世在地産土器について

浅野晴樹……197

ガラス小玉の製作と着色技法について

——御伊勢原遺跡出土のガラス小玉を中心として——

立石盛詞・井上 巍……213

北武藏における古瓦の基礎的研究II

昼間孝志・宮 昌之
木戸春夫・赤熊浩一

第1章 埼玉県中央部における古代寺院の概観

今回の古瓦の基礎的研究は、埼玉県中央部に所在する古代寺院及び関連遺跡を中心に、若干の知見と説明を加えるものである。

我が国に仏教が公に伝えられたのは、6世紀前半の欽明天皇戊午年(538)、百濟の聖明王が仏像・經論を朝廷に献上した時のことである。崇峻天皇元年(588)の史料には、百濟から仏舍利・僧・寺工・鍾盤博士・瓦博士・画工が渡来し、飛鳥真神原の地に法興寺(飛鳥寺)を建てたことが記録されている。本格的寺院建築としては我が國初であり、完成は推古天皇4年(596)であった。

武藏国における最初の瓦葺寺院は、仏教の伝来からおよそ一世紀のうちに比企郡滑川町寺谷の地に建てられた飛鳥寺式に類似する素弁8葉蓮華文軒丸瓦を持つ寺谷廃寺である。推古天皇32年(624)9月には46か所の寺があったことが日本書紀に記されており、寺谷廃寺がこの中に含まれていたかどうかは知り得ないが、周辺には渡来系氏族との関係が論じられている胸張りの横穴式石室を有する古墳や、畿内の須恵器を焼成している羽尾窯跡・平谷窯跡があり、7世紀前半のこの地には、寺院を建てるための下地は充分整っていたといえる。

7世紀後半に入ると、赤沼瓦窯跡の単弁8葉蓮華文軒丸瓦、大谷瓦窯跡の単弁10葉蓮華文軒丸瓦、小用廃寺の単弁12葉蓮華文軒丸瓦等、弁中央に子葉を持つ瓦が現われる。子葉を持つ瓦は飛鳥山田寺に初現を求めることが出来るが、これらの瓦は、平坦な弁、細い子葉、囲線の無い外縁等、飛鳥寺式の弁に子葉を付した様な独特の文様で、山田寺式とは明らかに異質である。

8世紀前半の寺院としては、大久保領家廃寺、小用廃寺が存在する。内傾する周縁の内側に交叉する鋸齒文が廻る複弁8葉蓮華文軒丸瓦は、西戸丸山窯において焼成されている。大久保領家廃寺のある鴨川流域には、瓦を出土する遺跡が多く、白銀古墳群・側ヶ谷戸古墳群・大久保古墳群等、7世紀後半から8世紀初頭の古墳が多数築造されており、有力氏族の存在を窺わせている。

8世紀中葉には国分寺の造営という国家的事業を契機に、南北比企窯跡群においての造瓦活動が活況を呈する様になる。しかしながら造寺活動はこの時期を境に衰退し、8世紀後半に創建された旧盛徳寺を最後とする。衰退の理由として高橋一夫氏は「国分寺造営を優先したため他の寺院の造営が規制されていた。各郡・有力氏族に新たな寺院を建てるだけの余裕がなかった。すでに有力氏族の造寺活動は終了していた」等をあげている。(高橋、1982)

以上中央部における寺院の概観を行ったが、このうち発掘調査が実施されたのは旧盛徳寺だけである。他の寺院跡から採集された瓦は少なく、創建時のものか、増改築等によるものなのかの判断は難かしい。また瓦窯と寺院との関係を求めるのも今後の課題として残されている。(宮 昌之)

第2章 遺跡と出土遺跡

第1節 寺院

諦光寺廃寺

立地と環境

寺院跡は川本村大字本田字窓場にあり、荒川の右岸から約1.5km離れた位置にある。この地域は百濟木（百濟來の転訛か）とも呼ばれ、興味深い地名となっている。また平安時代鑄造と考えられており小金銅仏の出土でも知られている。

寺院跡の周辺には数か所の瓦出土地があり、北東に数百m離れた所には荷駄ケ谷戸窯跡がある。東南側約1kmには近年発見された寺内廃寺がある。北約1kmの位置には、ます塚古墳（方墳）や鹿島古墳群が存在する。鹿島古墳群はすべてが胴張り型の横穴式石室を持つ古墳で、7世紀後半から8世紀初頭の年代が与えられている（塩野他、1972）。胴張り型の横穴式石室を有する古墳の形成要因は、横渟屯倉の設置、その管掌者として派遣された吉志集団に求められるにし、西暦600年前後に比企地方に出現し、7世紀後半に荒川中流域右岸の段丘上に到達して終わるという（金井塚、1976）。そしてこの時の吉志集団の後裔が、武藏国分寺七層塔の再建や2人の息子が一生に納めるべき調・庸を一括して納めたいと願い出たことで知られている「男衾郡櫻津郷戸主外從八位上壬生吉志福正」であり、この櫻津郷は本寺院跡を含む川本・江南町群であろうと考えられている（原島、1978）。

出土遺物

遺跡周辺を踏査したが、瓦は採集されなかった。百濟木出土として伝えられている平安時代後半頃の小金銅仏（高さ10.9cm）は、本寺院跡の出土と考えられている。

年代

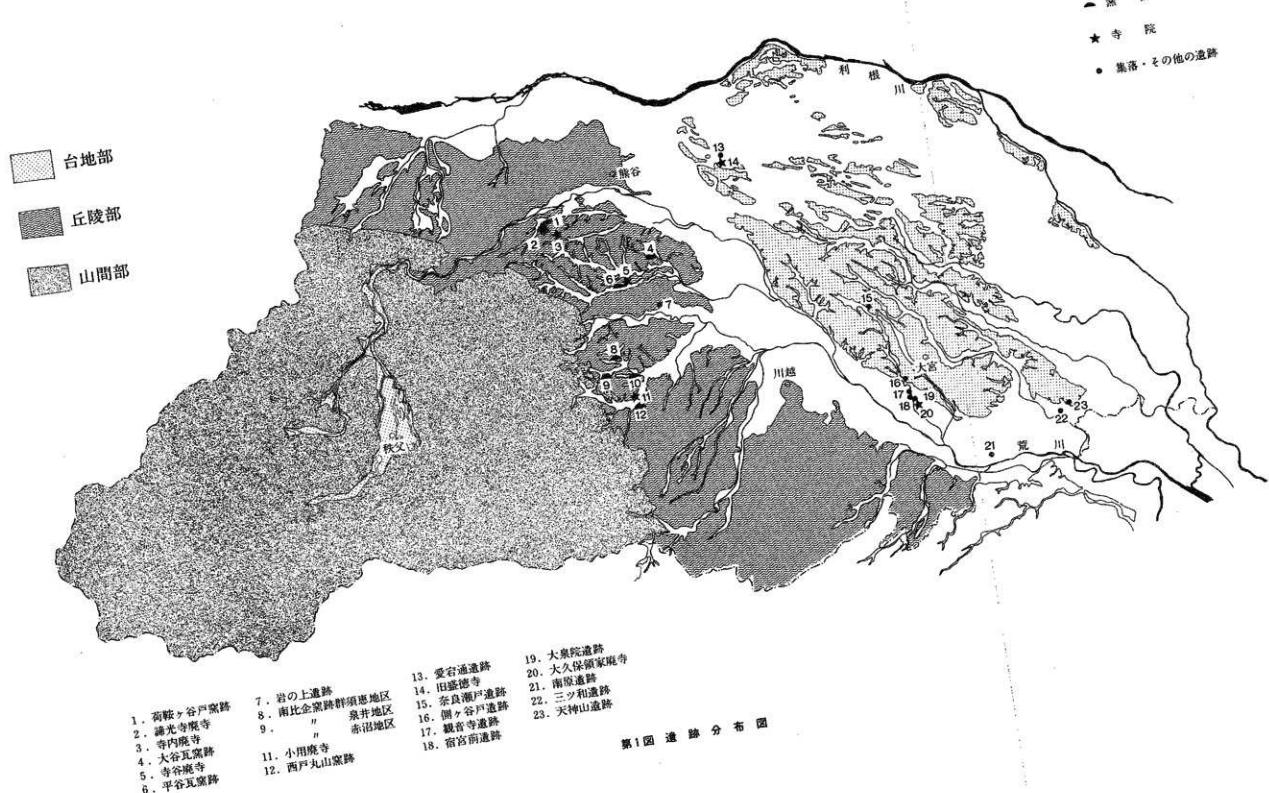
瓦の詳細が不明であるが、荷駄ケ谷戸窯跡からの供給を考えれば8世紀第1四半期の年代を与える事が可能である。

寺内廃寺

立地と環境

寺院跡は江南町大字千代字寺内にあり、荒川右岸から約2km、川本町諦光寺廃寺の東南約1.2kmの所に位置し、標高約70mを測る江南台地上に立地する。周辺2km以内には、平方前・千代・塩古墳群が、荒川右岸沿には鹿島古墳群があり、7世紀後半以降の古墳も数多く分布している。周囲には古墳時代から奈良・平安時代にかけての集落も広がっている。

遺跡には松葉が積もり、範囲が判然としないが、50m程の範囲の中に方形の高まりが数か所発見された。これらが基壇であるとすれば極めて遺存状態の良い寺院跡といえる。高まりの規模はおよよ次の通りである。北側は東西20m、南北12m、中央東側10m四方、同西側東西18m、南北10m、南側5m四方、この他にも若干の高まりを認める事が出来る。また東約0.7kmの地点には金胎寺



第1回 遺跡分布図

跡があるが、詳細は不明である。

出土遺物（第2図）

平瓦

凸面に繩叩きを施している。繩目は3cmに10本～12本である。凹面は布目痕を残し、広狭端両方向に部分的にナデられている。布目は3cmに20本前後で、広狭端両方向にやや布が伸びている。胎土には白色針状物質、白色砂粒を含むが、砂粒は少ない。色調は濃灰色～赤褐色を、胎土は赤褐色を呈し、表面だけ還元状態となっている。

年代

繩叩きを施す一枚造りの平瓦は年代幅があるが、南比企窯跡群の製品である事を考え、9世紀中葉と考えられる。

寺谷廃寺

立地と環境

寺谷廃寺は比企郡滑川村大字羽尾字寺谷に所在する。遺跡は、北に滑川、南に市野川によって画された、比企丘陵の北側東端にあたる小丘陵に位置する。標高は、64～66mを測る。遺跡周辺には月輪古墳群、大谷古墳群など多くの古墳群が存在し、寺谷廃寺の南西約150mには、平谷窯跡が存在する。

出土遺物（第3図）

現存の興長寺の裏山が寺域として推定されている。資料はいずれも表探資料である。

軒丸瓦

素弁8葉蓮華文軒丸瓦である。直徑16.5cm、内区徑12.5cm、中房徑2.8cmと推定できる。周縁は、直立線で素文である。花弁は、弁端の反転を桜花状に表し肉薄である。瓦当と丸瓦の接合部は、粘土を込めて指圧した後、ナデ調整を施している。丸瓦凹面には細かい布目痕が残り、瓦当付近では、ヨコナデにより擦り消されている。色調は表面が淡明褐色、裏面が淡褐色。胎土は白色微砂粒を多く含み、角閃石粒、砂粒も含まれる。焼成は酸化焰。

平瓦

第1類

2～4は、凸面格子叩きを擦り消している。凹面は模骨痕が残る。2は、黄褐色で焼成良好。胎土は、細砂粒を含み緻密。3は、凹面の布目を部分的に擦り消している。

第2類

5は、斜格子の叩きを擦り消している。

第3類

6～8は、いずれも斜格子叩きである。6は、灰黒色で焼成良好。凹面の布目を部分的に擦り消している。7は、灰褐色で焼成やや不良。8は、格子目がやや小さく色調は赤褐色である。

第4類

9～11は、凹面にハケ目が見られやや薄手である。9、11は、灰白色。焼成はあまり良くない。



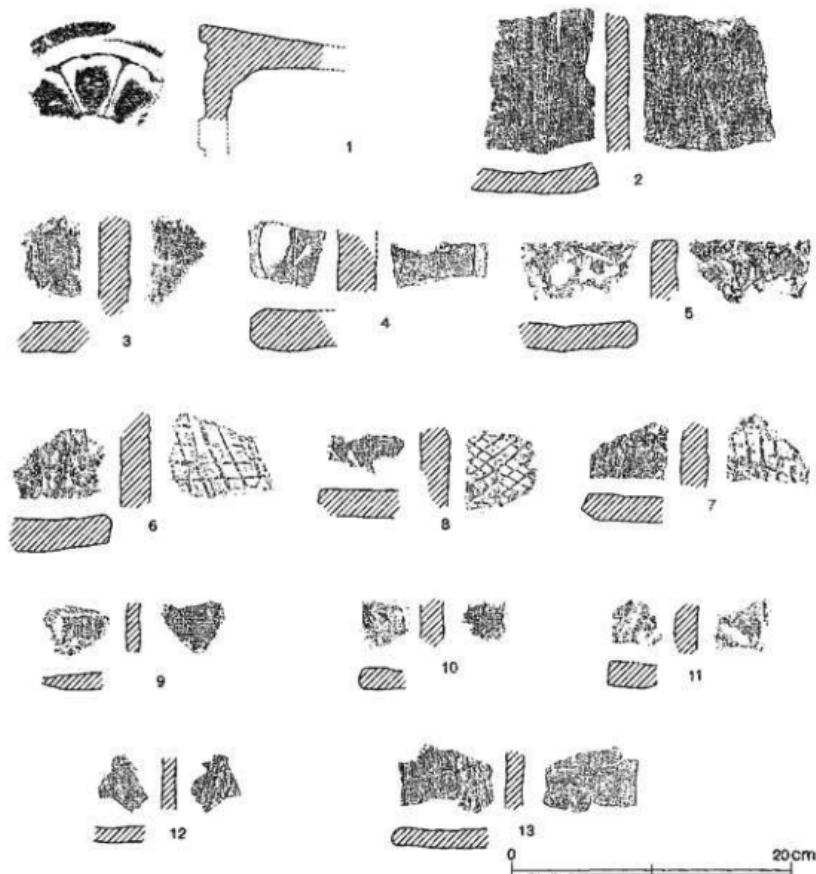
第2図 寺内廃寺

第5類

12・13は、凹面はヨコナデで布目を一部擦り消している。薄手で青灰色を呈し須恵質である。13は、凹面の布のつぎ目を指でナデ消している。

年代

軒丸瓦の瓦当文様は、飛鳥寺系軒丸瓦の特徴を示している。飛鳥寺の創建は596年でありこの創建瓦に比べ器肉がやや厚く、丸瓦との接合が丁寧におこなわれ瓦当面との角度はやや鋭角をなす点で後出的と考えられ7世紀前半としておく。平瓦は、いずれも小破片で全体を把握することはできないが格子叩きであることとそれを擦り消しているてんで古い様相である。近接の平谷窯跡出土上の瓦



第3図 寺谷窯跡

と極めて似ていることもあり、平瓦は、7世紀後半と考えたい。

小用廻寺

立地と環境

小用廻寺は、越辺川の左岸標高約40mの台地上に位置している。寺院跡推定地の北、300mには橘山興長寺があり、南西約1kmには西戸丸山遺跡が存在する。

周辺の越辺川及び高麗川沿いには西戸古墳群、川角古墳群、善能寺古墳群などの、7世紀中頃～末頃の胴張り横穴式石室を有する古墳群が点在する。集落跡は塚場山遺跡、旭台南遺跡、伴穴遺跡などがあるが意外に少ない。しかし、最近の発掘調査では毛呂山町や坂戸市周辺で、古墳時代後期から奈良平安時代の遺跡も確認されており、今後、周辺の関連遺跡は次第に充足される可能性がある。また生産遺跡では、寺院跡の立地する南北比企丘陵に赤沼瓦窯跡、山田窯跡、小谷窯跡、虫草山遺跡、宮の前窯跡、金沢窯跡、新沼窯跡などの奈良、平安時代の須恵器、瓦窯が数多く存在する。また、西戸丸山遺跡は從来より小用廻寺と同範の複介8葉蓮華文軒丸瓦を出土したといわれており、その関連性から窯跡と考えられる。

出土遺物（第4回）

軒丸瓦

第1類

1は単弁12葉蓮華文軒丸瓦で、天井部及び周縁の大半を欠損している。周縁は素文の直立縁である。蓮弁は比較的平坦で、棒状の子葉を持つ。間弁は楔型を呈し、中房に向って延びる。中房はやや高く、1+8の蓮子を持つ。

第2類

2は単弁6葉蓮華文軒丸瓦の破片である。周縁及び連弁の一部を欠損する。周縁は欠損しているため不明であるが、形態は素文の直立縁と考えられる。連弁はやや肉厚で変形の菱型を呈する。子葉ではなく、大型の楔型の間弁を持つ。中房はやや磨滅しているが蓮弁の高さは、ほぼ同じで、1+4の蓮子を持つ。

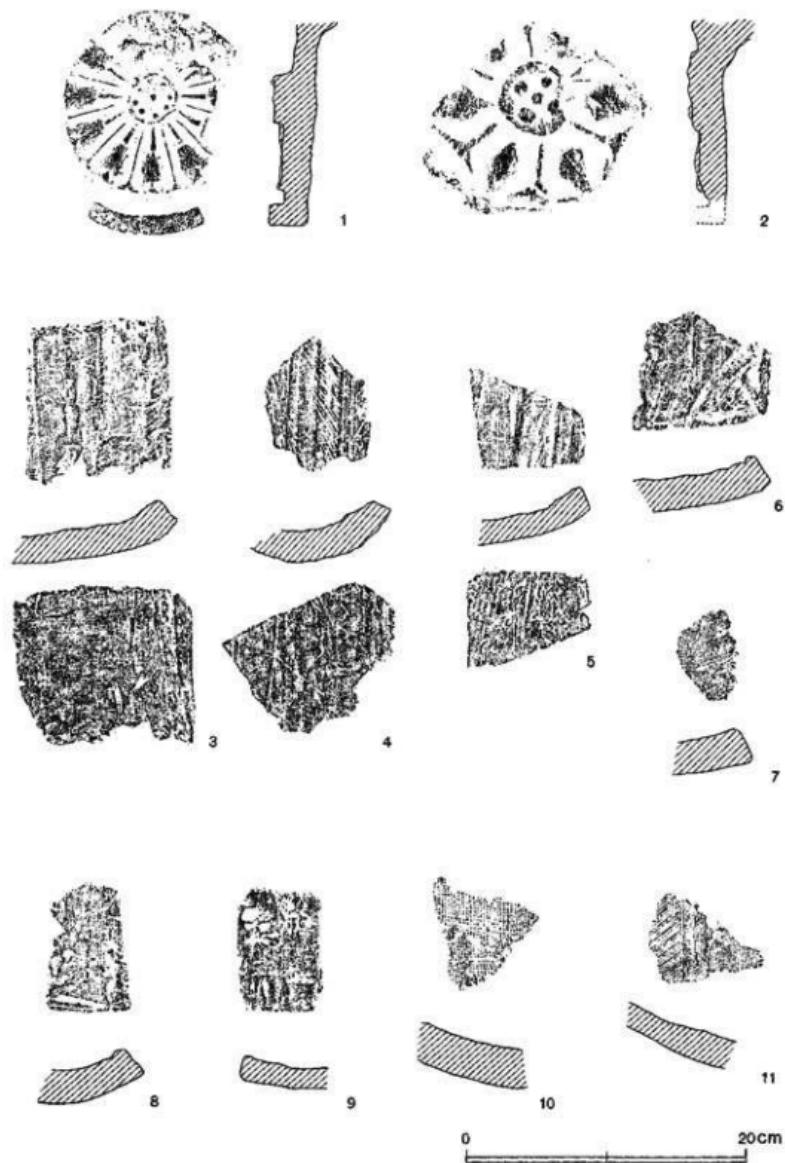
平瓦

第1類

3～6、9、11は桶巻造り技法による破片である。凹面には模骨痕及び3cmあたり30本の布目痕を残す。4、6、11には糸切り痕を残す。凸面は基本的に縦方向のヘラ状工具によるナデが施されるが、3は大型のものが使用されている。また、側端部は例外なくヘラケズリされている。色調は明褐色～灰褐色、胎土には石英粒を含む。11は暗紫青色を呈し、蓮元焰焼成、他は酸化焰焼成である。

第2類

7、8、10は一枚造り技法による平瓦小破片である。凹面は第1類とは異なり、模骨の痕跡は認められず、布目痕も3cmあたり18本とやや粗い。凸面はナデによる調整が行なわれている。色調は、明褐色～暗褐色、胎土には砂粒が多く含まれる。また7には白色砂粒が多く含まれる。



第4図 小用庵寺

年代

小用庵寺出土瓦の年代は、単弁12葉蓮華文軒丸瓦と桶巻造り技法による平瓦の年代がポイントになるものと思われる。単弁12葉蓮華文軒丸瓦は大谷瓦窯跡、赤沼瓦窯跡、勝呂庵寺出土瓦に類例があり、細部で異なるが、酷似したモチーフと言うことができる。大谷瓦窯跡及び赤沼瓦窯跡出土瓦は、勝呂庵寺へ供給された瓦と示唆されており、胎土や技法も類似している。また、平瓦については一般的に国分寺創建前段階は桶巻造りが行なわれたと考えられている。平瓦の年代をどこに置くかが問題である。県内における平瓦の初期は無文であったり、凸面の格子叩きを磨り消したり、という技法が盛んに行なわれる。凹面については比較的細かい布を使用しているケースが多く見られる。しかし、小用庵寺の平瓦はその技法から次段階あるいは律令制施行期頃のものと考えられる。従って、単弁12葉蓮華文軒丸瓦は7世紀末頃と考えられ、平瓦と組合わされることも十分可能と思われる。単弁6葉蓮華文軒丸瓦はやや後出的で8世紀後半以降と考えられる。また、前述のように小用庵寺には西戸丸山遺跡及び大久保領家庵寺出土の複弁8葉蓮華文軒丸瓦と同じ瓦が出土したとされており、単弁12葉の次段階に位置づけることができる。以上のことから現状では小用庵寺は勝呂庵寺と関連を持った氏族によって7世紀末頃に建立され、少なくとも8世紀代まで存続したものと考えられる。

旧盛徳寺

立地と環境

旧盛徳寺は、行田市大字埼玉1118番地に所在する。立地は低台地上である。標高は18mである。この低台地は寺院跡の西側にある埼玉古墳群から続く。北側には旧忍川が東流し、埼玉古墳群のさらに西側を忍川が南流する。現状は畠及び盛徳寺境内となっている。本格的な調査は1931年に埼玉県によって行なわれている（「埼玉県史」）。その後行田市（行田市教委、1975）や県立さきたま資料館（1977）によって行なわれている。

周辺には前述の埼玉古墳群をはじめとして若王子古墳群、若小玉古墳群、小見古墳群等が存在する。埼玉古墳群は国宝に指定された辛亥銘鉄劍を出土した稻荷山古墳など、大小30基以上が確認されている。年代は稻荷山古墳が6世紀前半で最も古く、新しいものは6世紀末から7世紀初頭の将軍山古墳である。集落では小針遺跡、陣場遺跡、高畠遺跡、原遺跡、野合遺跡等がある。また、寺院跡付近からは「矢作印」の銅印が出土している。

出土遺物（第5図～第7図）

軒丸瓦

第1類

1、2、4は、単弁4葉で瓦当面に繩叩き痕を残しているものである。1は瓦当部径18.2cm、内区径18.0cm、瓦当部厚0.8～2.3cmである。中房ではなく、蓮子のみが4個配される。弁は内側の彫りが鋭く外側が丸みを持った線で表現され、内部に八形の凸線を持つ。間弁は足がなく両端は長く伸びて隣の間弁に接続する。界線を挟んで外区には幅広く不明瞭な圓線がめぐる。瓦当裏面には無紋りの布目痕が残る。下半部の側端は内側に曲がっている。なお、瓦当面の繩目痕は窪んだ部分にも見られ範型を押す前に叩かれていることがわかる。以上のことから一本造り技法と考えられる。2、



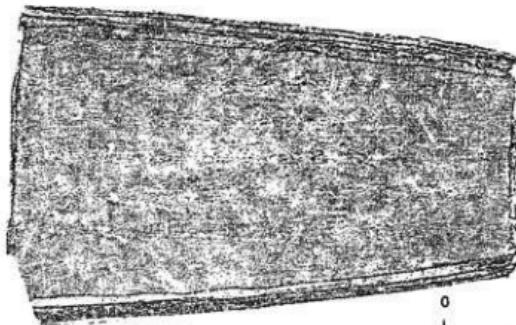
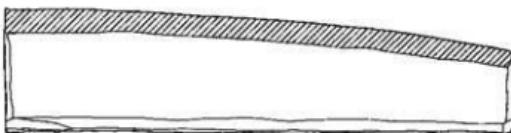
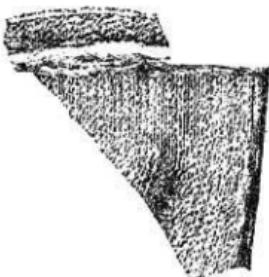
第5圖 旧盛德寺(1)



10



11



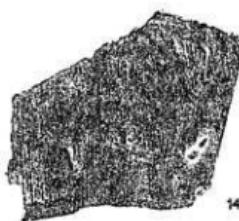
0

20cm



12

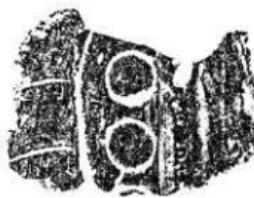
第6図 旧盛德寺(2)



14



15



15



0

20cm

第7図 旧盛德寺(3)

4とも1と同範である。胎土は1が砂粒、鉄分粒子、2は0.5~1mmの白色、黒色不透明粒子、4は白色不透明粒子を含む。色調は2が橙色から明褐色、4は灰色。焼成は2はやや軟質、4は良好である。

第2類（3、5）

単弁4葉蓮華文軒丸瓦である。3は瓦当部推定径16.0cm、瓦当部厚1.6cmである。図の資料では欠損しているが、他の資料から推定すると中房は持たず、1+4の蓮子を配するものと考えられる。蓮弁は凸線で2重に表現される。間弁は扁状を呈する。その外側には幅広の凸帯がめぐり界線と考えられる。外縁は直立せず、三角縁となる。瓦当裏面は無絞りの布目痕が残る。一本造り技法と考えられる。5も同範であろう。胎土は3が石英、5は砂粒を含む。色調は3が濃灰色、5は淡灰色で焼成は共に良好である。

第3類

破片のため詳細は不明である。6は瓦当部厚1.8cm、7は1.8~2.4cmである。瓦当裏面はヘラ整形される。6では瓦当側面にナデと一部ヘラケズリが加えられている。胎土は白色粒子、赤色スコリアを混入する。色調は6は灰褐色、7は灰褐色から黒褐色を呈し、焼成は良好である。

軒平瓦

第1類

8は、重廓文軒平瓦である。上下2本の弧線はそのまま右端に接合しているが重廓文である。

第2類

9は、唐草文軒平瓦である。約左半分の残存で中央部から右側が欠損している。主茎のみの唐草で4単位認められる。

第3類A

細い斜格子文の軒平瓦である。10は瓦当部厚3.8cm、平瓦部厚2.0cm、額の幅3.2cmである。平瓦部凹面は布目痕が残り、縁辺部は削られる。額は曲線額で、額部は横位の繩叩き、平瓦部は縦位の繩叩きがみられる。瓦当接合部は指ナデが施される。砂粒の混入は少く色調は灰色から灰黒色で、焼成は良好である。

第3類B

12は、太めの線で粗く深い格子文が施される。瓦当部厚3.2cm、平瓦部厚1.8cm、額の幅は5cmである。平瓦部凹面は布目痕が残る、額は曲線額で、額部と平瓦部の繩叩きはA類と同様に施される。胎土は石英を含む。色調は灰色で須恵質である。

第3類C

11は、乱雑で浅い斜格子文が施される。瓦当部厚3.5cm、平瓦部厚1.3cm、額の幅は2.3cmである。凹面は布目痕があり縁辺部はA類と同じように削られる。額は曲線額で額部は斜位の繩叩き、平瓦部は縦位の繩叩きが施される。額の接合部はナデられる。側端面の縁辺部は叩きの後削られる。桶巻造りと考えられる。砂粒、鉄分粒子を含み灰白色で焼成は良好である。

丸瓦

13は、長さ45.3cm、広端部幅15.3cm、狭端部幅13.0cm、厚さ1.2~2.0cmである。凹面は布目が見

られる。布目は1cmあたり6本である。側端部及び狭端部はヘラケズリされ、凹凸面に面取り状にヘラケズリされる。狭端部の角は小さく隅切りされる。胎土は砂粒を少量含み色調はにぶい褐色から橙色で焼成はきわめて良好である。

平瓦

第1類

15は、厚さ2.1cm。凹面には布目痕と模骨痕が見られる。模骨痕の幅は3cmである。凸面は繩叩きの後ナデにより一部消されている。側端面はヘラケズリされ凹凸面に面取りをしている。石英、砂粒等を含み色は淡灰色で焼成は良好である。

第2類

14は、凸面に斜格子を持つものである。大きさは40.3cm×30.2cm、厚さ1.2~2.6cmである。凹面には布目痕と模骨痕が残る。模骨痕の幅は約4.2cmである。布目痕の上には不定方向の指頭によるナデが行なわれている。凸面の斜格子は幅6.4cmの叩き板により円弧を描いて叩かれている。端面は直角に切られ凹面の一部に面取り状の削りがなされる。桶巻造りである。

鬼瓦

16は、左脚の残欠である。厚さ6.4cm、幅13.4cmである。表面、裏面とも全体にナデ調整されるが裏面はクシ状工具によるナデである。全体の形態は不明であるが、下端の割り込みは残存部で直線を示し、前面の角はやや高まりをもつ。高まりに沿って沈線が施され、その外側には沈線によって形つくられた径3.4cmの円文がみられ、白色顔料が塗布されている。さらに外側には太い沈線がめぐり、その外側には直行する幅状文がみられる。胎土は砂粒を含み、色調は外側が灰色から黒褐色で、器肉が赤褐色を呈し、焼成は良好である。

年代

瓦の年代は東廓文軒平瓦が8世紀第4四半期。単弁4葉軒丸瓦が9世紀第3四半期と考えられている(西井、1982)。

大久保領家庵寺

立地と環境

大久保領家庵寺は、鴨川左岸の自然堤防上の南端部に位置している。この自然堤防は与野市白銀付近から浦和市にかけて南北に続くもので、この他にも鴨川沿いにはいくつか自然堤防が存在する。自然堤防は荒川(旧入間川)や鴨川などの河川によって形成され、微高地となっている。

寺院跡周辺には古墳時代後期から奈良、平安時代の遺跡が数多く存在する。主なものに大久保古墳群、白銀古墳群、白銀道跡、八王子前原遺跡、寺田遺跡、上峰、宮前遺跡(以上古墳時代)、宿宮前遺跡、宮田墓地遺跡、大泉院境内遺跡、観音寺境内遺跡、本村遺跡(以上奈良平安時代)などがある。

大宮市南西部から浦和市北西部にかけての鴨川流域では古くから古瓦や須恵器等が出土することで知られている。大久保領家庵寺推定地の日枝神社周辺では鴨川に面した陸田から出土している。この他、大泉院境内遺跡、観音寺境内遺跡、宮田墓地遺跡、宿宮前遺跡、本村遺跡などから古瓦が出土しており、概ね、大久保領家庵寺を南限、観音寺境内遺跡を北限とした南北約500m、東西約150

の範囲で古瓦が出土すると考えられる。とりわけ、大久保領家庵寺と大泉院境内遺跡出土の三重弧文軒平瓦は同范あるいは同一の技法によるものと考えられ、遺跡も近接することから、その関連性が注目される。

出土遺物（第8図）

軒丸瓦

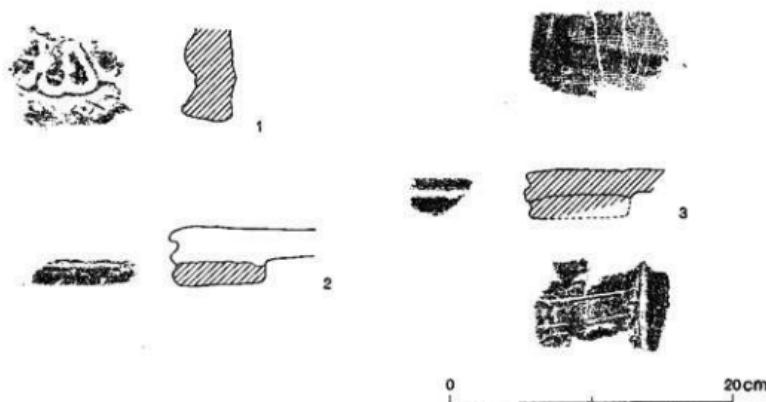
1は複弁8葉蓮華文の破片で、中房以上の大部分を欠損している。内区の蓮弁は磨滅しているが、やや肉厚で、細隣線で区画される。外区にあたる周縁は内傾し、幅3～4mmの外縁の内側に交叉鉛歯文を配する。周縁側面及び瓦当裏面はナデ調整される。復元直徑約18cm。色調は青灰色を呈し、胎土に2mm程の粗砂粒を含む。焼成は良好である。還元焰焼成。

軒平瓦

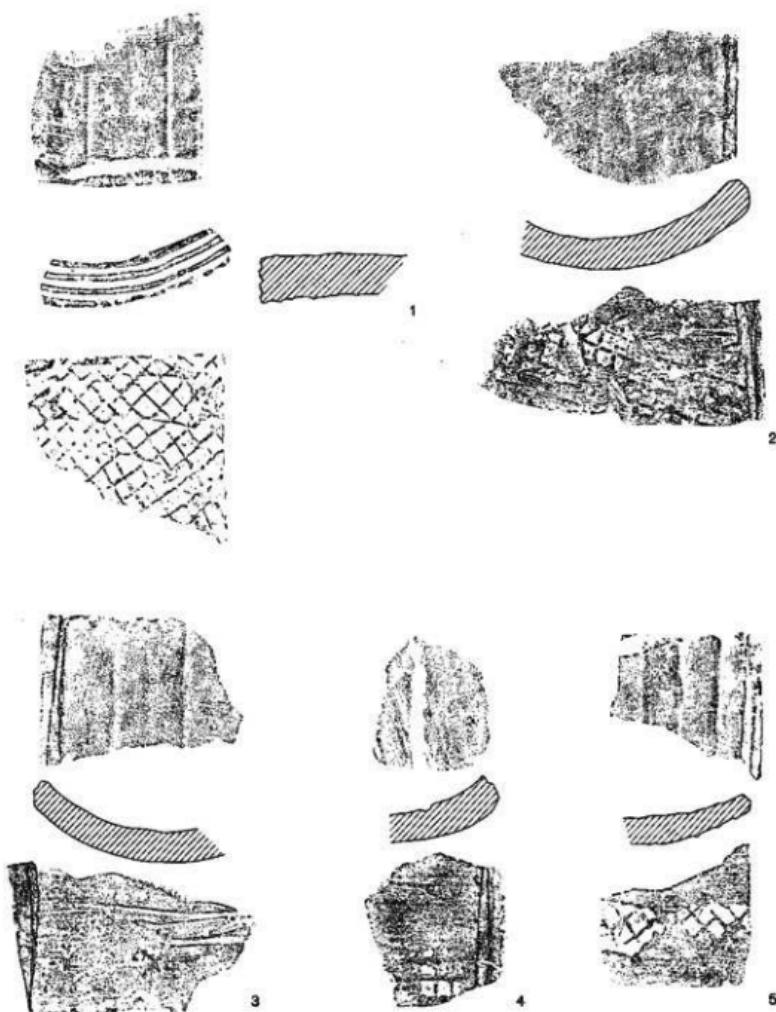
2、3は三重弧文軒平瓦の小破片で、同范の可能性がある。2は平瓦部が剥離し、段階の頸部分の残存である。全体にナデ調整される。色調は灰褐色、胎土には白色微砂粒を多量含む。3は瓦当面の頸部分が剥離したものである。2同様、三重弧文の弧線は浅い。凹面には布目痕を残すが、一部ナデ消される。剥離した部分には、頸部との接合を強固にするためのヘラによる2本の沈線が入る。色調は灰褐色～黒灰色、胎土には白色微砂粒多量含む。2、3とも還元焰焼成で、焼成は良好である。

年代

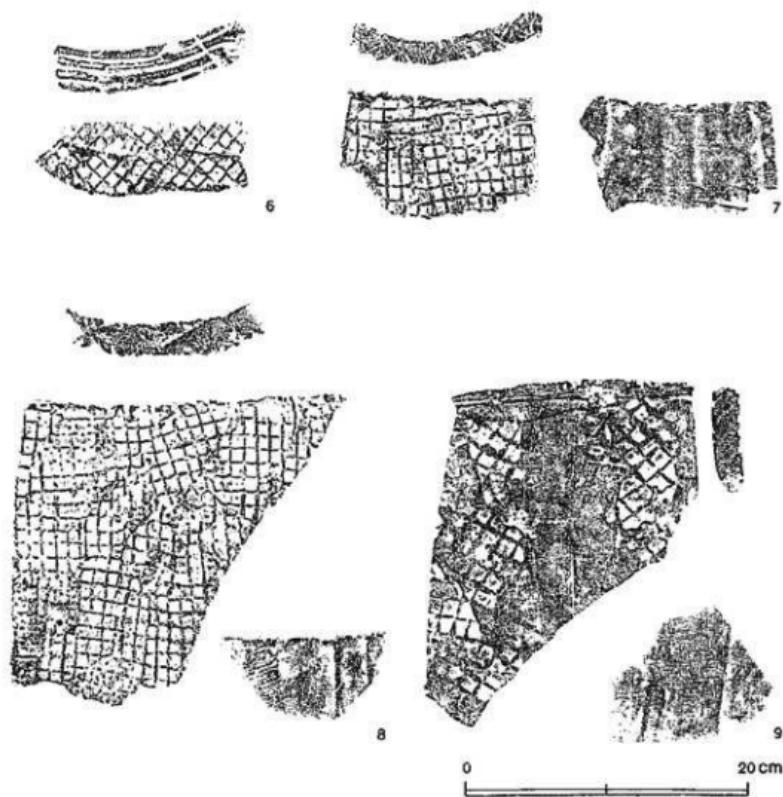
現在、複弁8葉蓮華文軒丸瓦は毛呂山町にある西戸丸山窯跡出土瓦と同范とであり、小用庵寺、大久保領家庵寺は供給を受けたものと考えられている。三重弧文軒平瓦は、県内では8世紀前半頃に最も盛行した型式であり、軒丸瓦同様8世紀第2四半期頃が考えられる。大久保領家庵寺、道場寺院跡は上記の瓦が現存する最古の瓦であることから、県内における寺院造営盛行期（8世紀第2



第8図 大久保領家庵寺



第9図 荷鞍ヶ谷戸窯跡(1)



第10図 荷鞍ヶ谷戸窯跡(2)

(四半期=律令制再編の前期)に造営された可能性が強い。

第2節 窯 跡

荷鞍ヶ谷戸窯跡

立地と環境

川本町大字本町字荷鞍ヶ谷戸にあり、県立小原療養所の北方約1.5kmの所に位置する。遺跡は荒川右岸、南に向って入り込む谷の東側緩斜面に位置する。周辺にも瓦の散布する地域があり、窯跡の存在が予想される。また平安時代の金銅仏が発見された諦光寺廃寺は本遺跡の西南数百mの所にある。遺跡の北側、荒川に面した段丘上には6世紀後半から8世紀初頭の年代が与えられている鹿島古墳群があるが、調査した古墳はすべて胴張りの横穴式石室である。

出土遺物（第9・10図）

軒平瓦

1はヘラ描きの三重弧文で、彫は浅い。瓦当側のみの残存であるが、直線類と考えられる。瓦当面の厚さは3.2cm、凸面は正格子に近い斜格子叩きが施されている。側端部はヘラケズリされている。凹面には布目痕と模骨痕がみられ、布目痕は3cmあたり27本前後である。胎土には砂粒・小石を含み、色調は灰褐色。6は柴田常恵氏資料で拓本のみである。瓦当面の厚さはほぼ同じで、格子の間隙がわずかに狭い。

平瓦

第1類

2・4・5・9は凸面に部分的な格子叩きを施し、横方向のヘラケズリをしている。凹面に布目痕がみられるもので、布目は3cmあたり27本前後である。5には模骨痕が、4には布の継ぎ目があるが、2・4には模骨痕が認められている。9の柴田常恵氏資料を除きいずれも側端部はヘラケズリされ、胎土には砂粒・小石を含み、色調は褐色を呈している。

第2類

7・8はいずれも柴田常恵氏資料である。凸面の格子叩きが第1類よりわずかに小さく、6と同じ叩きと考えられる。凹面は布目が3cmあたり27本前後である。

第3類

3の凹面は第1類と同様であるが、凸面が横方向のヘラケズリにより、叩きが消されているものである。他の部分に叩きが残っている可能性もある。胎土・色調は第1類に同じ。

年代

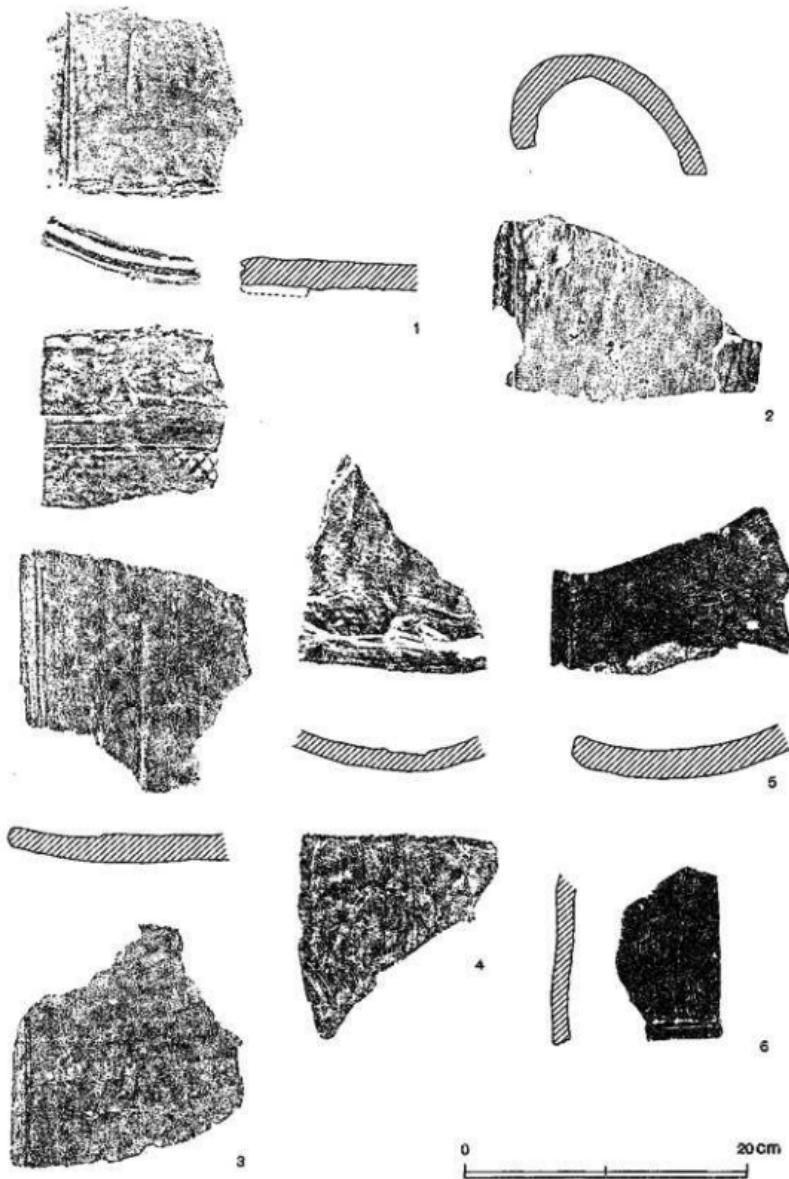
平瓦は桶巻造り、軒平瓦はヘラ描き三重弧で、直線類を持ち、凸面格子叩きを施している。以上の様相から8世紀の第1四半期に位置づけられよう。本窯跡の瓦は諦光寺廃寺への供給が考えられているが、瓦は採集されていない。

平谷窯跡

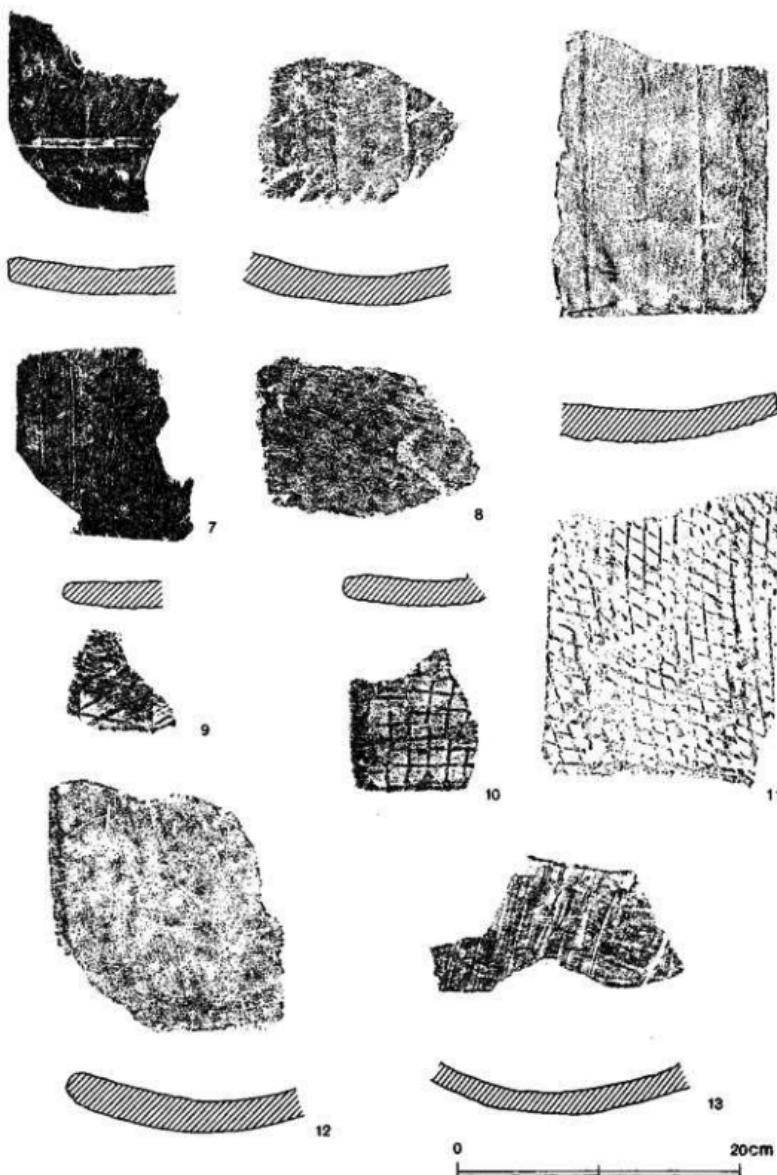
立地と環境

平谷窯跡は比企郡滑川町大字羽尾字平谷に所在する。立地は北比企丘陵の東端にあたる。北比企丘陵は北側を荒川が南側を都幾川が東流する。さらに遺跡をのせる小丘陵は北側を滑川南側を市野川が流れる。標高は60~62m付近である。水田との比高差は12~13mである。本格的な調査は行われていないが、窯体の一部が道路により切断されている。瓦陶兼業窯である（高柳、1979）。

周辺の遺跡は数多く知られている。古墳時代後期の古墳群では平古墳群、大谷古墳群、表古墳群、唐子古墳群、中尾古墳群等がある。大谷古墳群中の愛宕塚古墳群は複室で洞張りの横穴式石室を持ち、7世紀後半と考えられている（東京大学考古学研究室、1964）。市野川以南には月輪神社古墳、月輪古墳群などがある。滑川以北には両表古墳群、寺前古墳群、大木古墳群、栗各古墳群、糟沢古墳群、西山古墳群、中山古墳群がある。集落では寺谷遺跡のみが知られている。窯跡は支尾根を隔てて羽尾窯跡がある。また、尾根上には至近距離に寺谷廃寺がある。



第11図 平谷窯跡(1)



第12図 平谷窯跡(2)

出土遺物（第11～13図）

軒平瓦

1は、ヘラ描きによる三重弧文軒平瓦である。瓦当上端はヘラケズリによる面取りがなされる。凹面には布目痕が残り、部分的に斜めに磨り消している。布目痕は1cmあたり11本である。凸面は格子叩きの後ヨコナデを施す。顎は段顎と思われる。平瓦部分の厚さは約1.8cmである。胎土は白色微砂粒を含み、色調は表面青灰色、内部は赤褐色である。

丸瓦

2は、凸面はナデられる。凹面は布目痕が残る。布目は1cmあたり11本である。側端面はヘラケズリされる。胎土は粘質で白色微砂粒、細砂粒を含む、色調青灰色。

平瓦

第1類

4は、凹に模骨痕及び布目痕が残る。布目は1cmあたり11本である。端部はヘラミガキが施される。厚さは1.3cmである。胎土は精選され白色微砂粒を含む。色調は暗褐色から淡褐色で焼成は良好。

第2類

3、5～8、12、13は、凹面に模骨痕及び布目痕が残る。布目痕はヘラケズリによって一部または全面が消されている。布目痕は1cmあたり9～11本である。凸面は基本的にナデが施される。

7、13などは板状工具により縦方向にケズられている。これらはケズリの種類により細分することも可能である。なお7では一部斜格子叩きが残る。厚さは2cm前後である。胎土は1類に比べて粗いが白色微砂粒を含む点では同じである。色調は13は清明褐で焼成良好。5・7・8は青灰色、12は淡赤褐色で焼成良好。3は明褐色、6は暗灰褐色である。

第3類

10、14は、凸面に正格子叩きを施すものである。凹面は10では布目痕が残る。凸面の格子間隔は約1.5cmである。側面は14ではヘラケズリされる。厚さは10は1.8cm、14は1.3cmである。胎土は10は白色微砂粒、石英細粒、砂粒、14は白色微砂粒を含み粗い。色調は10は淡褐色から明褐色、14は黄褐色である。

第4類

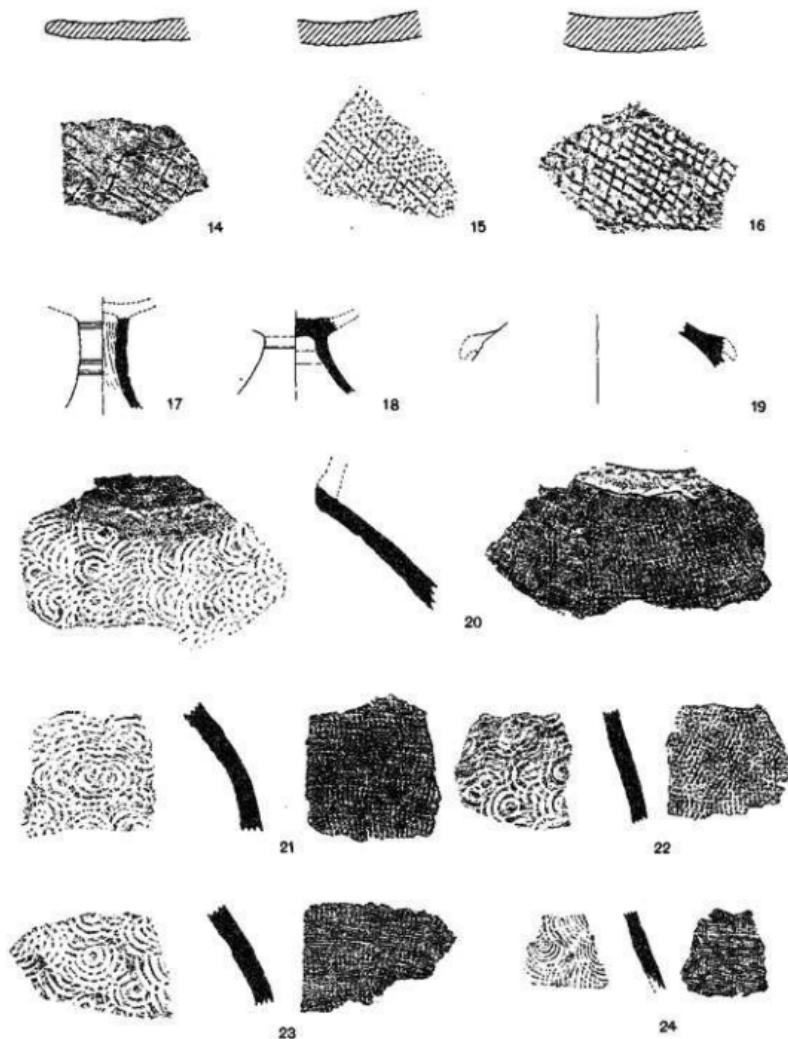
9は、凸面に粗い斜格子叩きを施すものである。格子間隔は1.0～1.8cm。厚さは約1.8cm、胎土は白色微砂粒を含む。色調は青灰色である。

第5類

第4類同様斜格子の叩きが施されるものであり、格子が第4類より細かい。凹面には模骨痕及び布目痕が残る。布目は1cmあたり8本である。側面はヘラケズリである。厚さは1.4～2.4cmである。胎土は白色微砂粒、細砂粒、微砂粒を含む。色調は青灰色で焼成良好。

第6類

16は、凸面斜格子の叩きである。格子間隔は0.7～1.0cmで第4類、第5類よりさらに細かい。凹面には布目痕があり1cmあたり11本である。厚さは2.4cm。胎土は白色微砂粒を含み色調は赤褐色。



0 20cm

第13図 平谷窯跡(3)

焼成良好。

第7類

15は、凸面の斜格子の叩きが一番細かいものである。間隔は約0.5cmである。凹面は布目で1cmあたり11本である。厚さ1.7cm、胎土は微砂粒を含み色調は灰褐色。

土器

高坏

17、18とも無孔で内外面とも回転ナデ。17は長脚で基部径推定3.6cm、18は同じく4.4cmである。17の内面基部には絞り目が残る。胎土は白色微砂粒、砂粒を含む。色調は暗青灰色で焼成は良好。

堤瓶

把手部分の小破片である。把手はカギ形を呈すものと思われる。内面は回転ナデ調整されている。胎土は白色微砂粒、細砂粒を含む。色調は青灰色で焼成は良好。

甕

20~24は、いずれも肩部破片である。外面は平行叩きで23、24には叩き目に直行するカキ目が見られる。内面は同心円文である。胎土は白色微砂粒を含み、焼成は良好。色調は20が暗青褐色、21が暗紫青色、22が内面青灰色、外面暗赤褐色、23は内面淡青灰色、外面淡褐色、24は青灰色である。

年代

平谷窯は須恵器窯として操業し、後に瓦の生産も行なうようになったと考えられ、操業の時期を7世紀初頭、瓦の年代については重弧文軒平瓦が7世紀第4四半期と考えられている(藤原、1982)。

大谷瓦窯跡

立地と環境

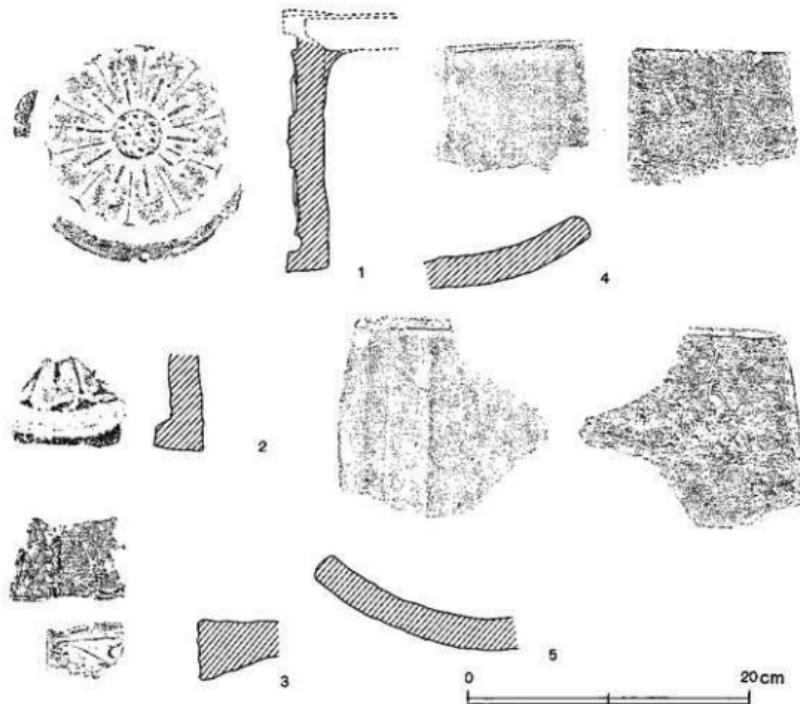
大谷瓦窯跡は、東松山市大字大谷字谷中に所在する国指定史跡である。遺跡は、比企丘陵の南斜面に立地している。ここには大小の河川によって侵食され起伏に富んだ地形を呈している。

発掘調査の結果、窯跡は、半地下式有段登窯を二基確認した。このうち、2号窯跡は全長7.6m、幅1.0m、段幅0.3mで13段を数えた。側壁は、粘土と粘板岩の細片や葉を混ぜたものを使用している。窯体内からは、単弁10葉蓮華文軒丸瓦や平瓦など多数の瓦が出土している。

出土遺物(第14図)

軒丸瓦

1は、単弁10葉蓮華文軒丸瓦である。中房に1+6の蓮子を配する。瓦当面の大きさは、推定直径18.7cm、中房径3.5cm、内区径13.0cm、周縁幅1.5cm、中房部分の厚さは2.6cm、子葉の長さ2.5cmを測る。花弁の肉盛りは薄くわずかに丸みをもってふくらみ、花弁先端がわずかに膨らむ。間弁は「Y」の字状を呈し先端で膨らむ。間弁の足はごく細く中房まで届き、長さ4.5cmを測る。棒状子葉は細く、長さ2.5cmを測る。丸瓦部は一般的な丸木状の型に巻く造りであると考えられる。瓦当裏面の丸瓦部との接合部に充填した粘土の盛りあがりがみられる。色調は茶褐色。胎土は砂粒を少量含み堅緻である。2は、推定単弁10葉蓮華文軒丸瓦である。中房は欠損している。瓦当面の大きさ



第14図 大谷瓦窯跡(1)

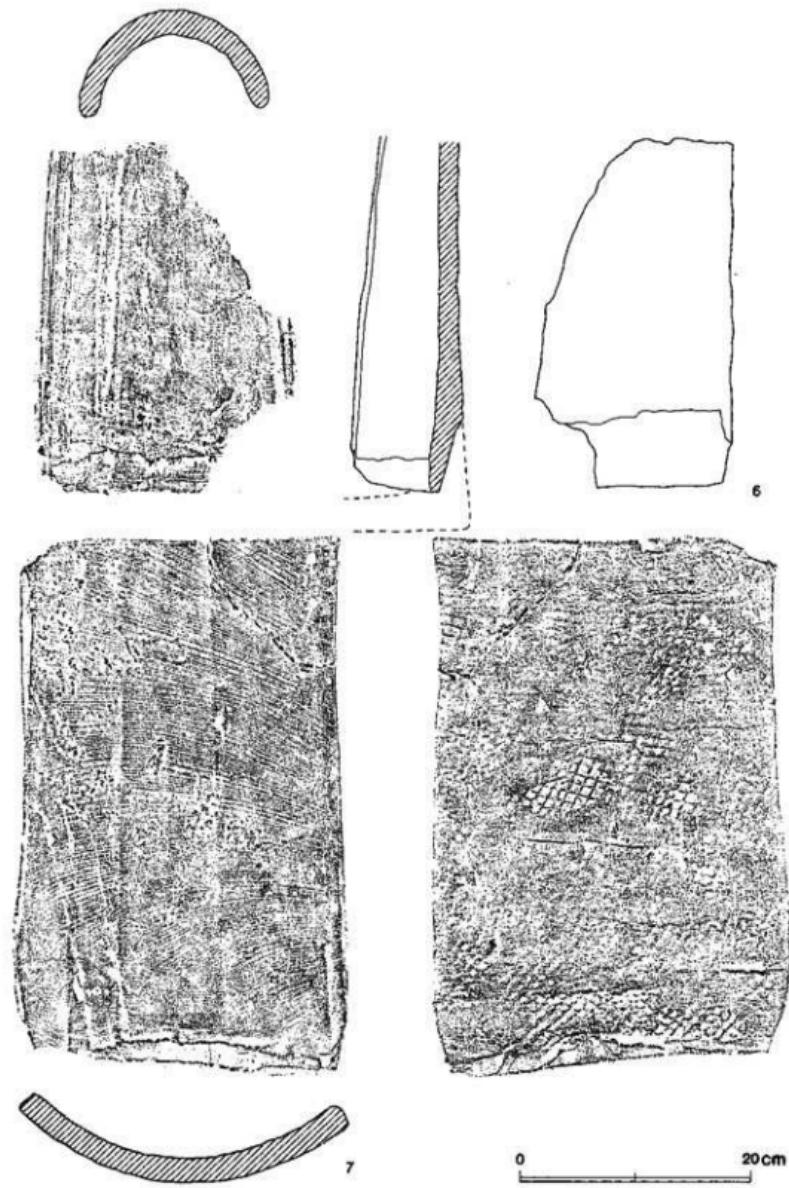
は、周縁幅1.2cm、周縁部分の厚さは3.5cmを測る。花弁はわずかに丸みをもってふくらみ、花弁先端がわずかに膨らむ。瓦当裏面はヘラナデ調整である。間弁は「Y」の字状を呈し先端で膨らむ。棒状子葉は細い。周縁は直立縁で内側にキザミが巡る。色調は褐色。胎土は砂粒・石英を少量含み堅緻である。焼成良好。

軒平瓦

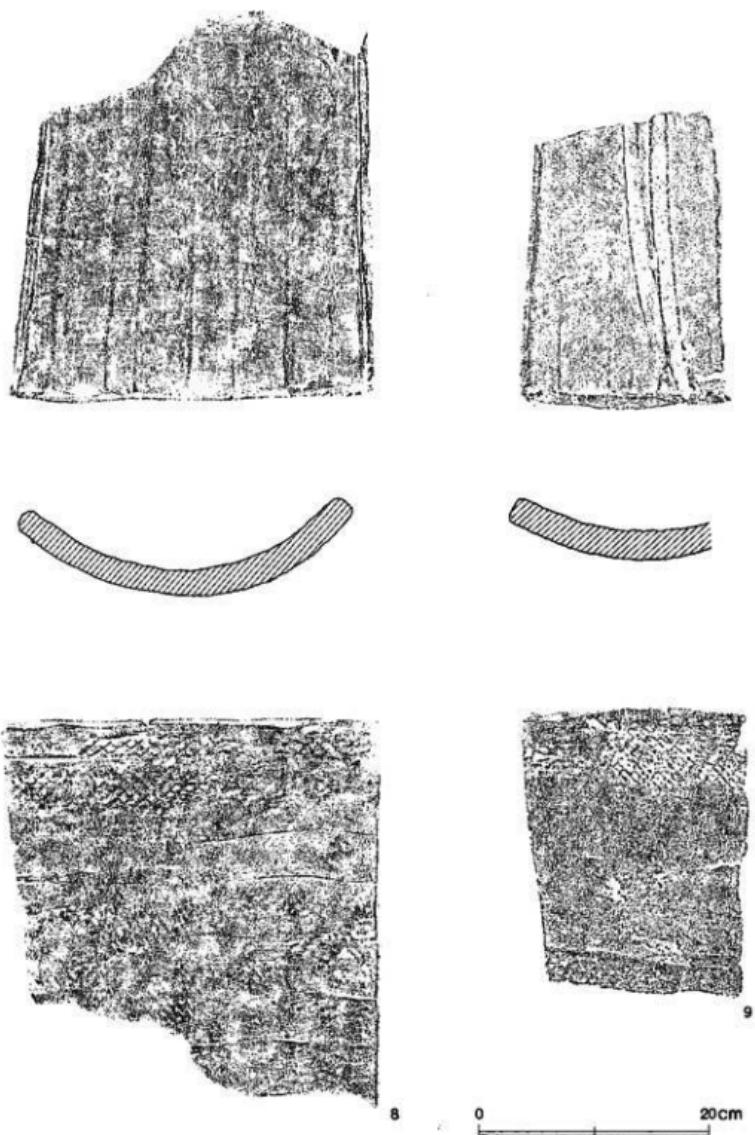
3は、飛雲文軒平瓦である。左側端のみ存在する。厚さ4.5cm、残存幅5.0cm、を測る。瓦当範は、明瞭であるが全体に浅く範による額の造り出しは見られない。額は、曲線額を呈している。凹面は、3cmあたり22×25本の布目痕をもつ。凸面は、ヘラ状工具によるケズリのちナデを施す。側面も同様の調整である。色調は暗青灰色。胎土は白色微粒子、雲母粒子を含む。焼成きわめて良好。

丸瓦

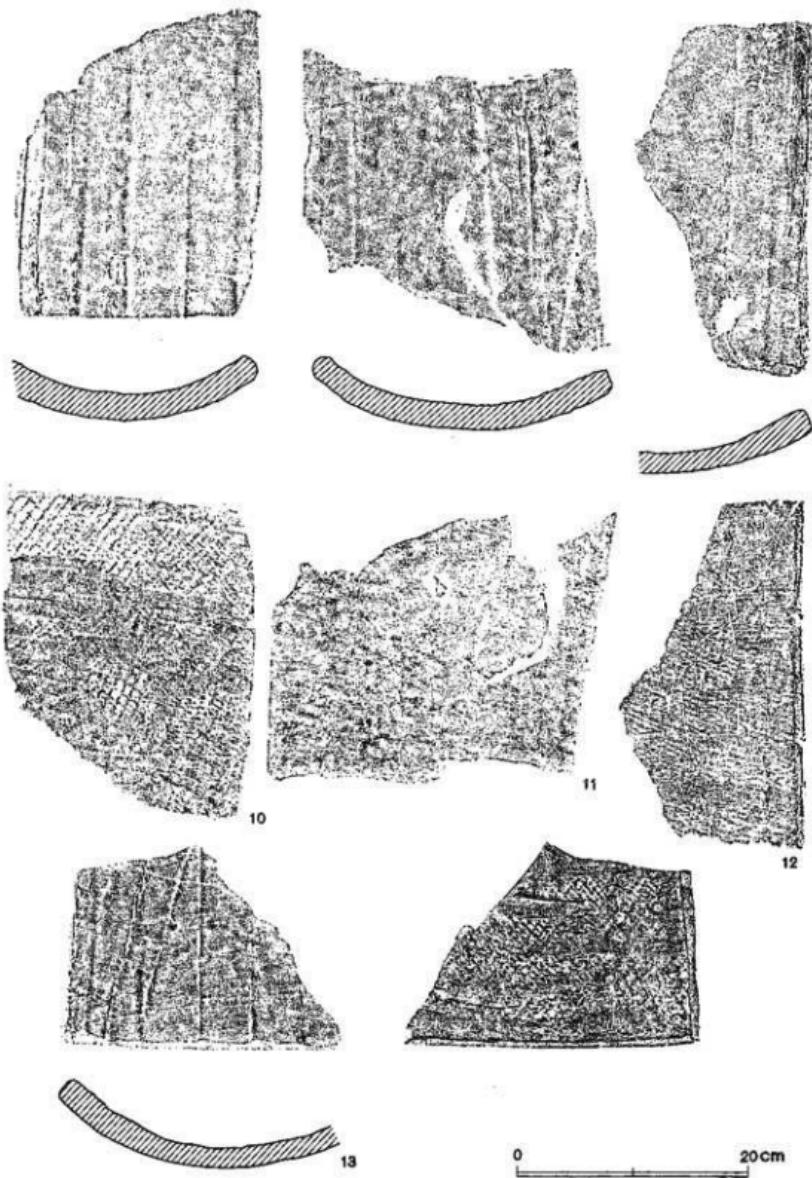
6は、軒丸瓦の瓦当面が剥離したものである。厚さ1.6~2.1cm、広端部外面で最大径17.5cm、残存長さ30.6cmを測る。凸面は、全面に細かくナデを施し、軒丸瓦接合部である広端部より幅6cmの



第15図 大谷瓦窓跡(2)



第16図 大谷瓦窯跡(3)

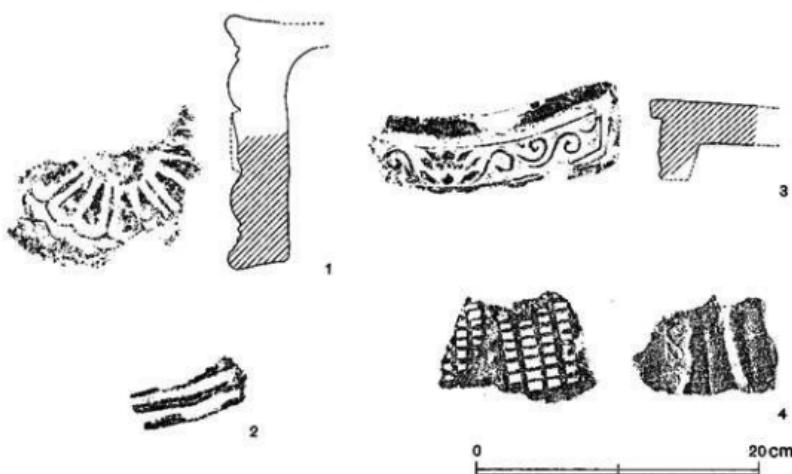


第17図 大谷瓦窯跡(4)

範囲にケズリを施している。凹面は、3cmあたり26×32本の細かい布目痕をもつ。広端部より2.5cmのところから5.5cmのところまで軒丸瓦接合の際の粘土が貼りついている。また、「Z」型の布縫じが見られる。両側面には、縦のヘラケズリ調整がみられる。広端面は、左から右への荒い斜めヘラケズリが施されている。色調は暗赤褐色。胎土は1mm前後の微砂粒を多く含む。焼成は堅緻。

平瓦

4・5は、文字瓦である。4は、厚さ2.2cm、幅11.9cm、長さ9.6cmを測る。凸面は、軽いナデを施した後に、「瓦枚二千月二」と記されている。凹面は、3cmあたり26×21本の細かい布目痕を残し、幅3.8cm、3.6cmの模骨痕をもつ。側面は縦方向のヘラケズリを施す。色調は青灰色。胎土は白色微粒子を多量に含み径2~5mmの小礫を含む。5は、厚さ2.3cm、幅15.4cm、長さ14.3cmを測る。凸面は、単位が明瞭でないが斜格子による叩きをナデ消した後に、「奈你寺」と記されている(註)。凹面は、3cmあたり28×24本の細かい布目痕を残し、幅3.0cm・4.0cm・4.5cmの模骨痕をもつ。側面は縦方向のヘラケズリを施す。色調は暗赤褐色。胎土は白色小粒子を多量に含み径2~5mmの小礫を含む。7は、厚さ2.1cm、幅28.2cm、長さ45.7cmを測る。凸面は、3本あたり2.5cm×2.5cmの斜格子叩きを施した後、横方向のヘラケズリを施し部分的に叩きを残す。凹面は、左から右方向への糸切り痕が明瞭に有り、3cmあたり25×21本の布目痕を残す。また、左側面から広端方向にかけて「S」型の布縫じが見られる。模骨幅は、右から5.5cm・4.0cm・8.0cm・6.5cmを測り、桶巻造りである。側面は広端から狭端方向へのヘラケズリを施す。色調は明棕褐色。胎土は径5mm程の小石と砂粒をわずかに含む。8は、厚さ2.4cm、幅29.4cm残存長さ33.6cmを測る。凸面は、3本あたり2.5cm×2.2cmの斜格子叩きを施した後、横方向のヘラケズリを施し部分的に叩きを残す。凹面は、3cmあたり34×22本の布目痕を残す。模骨幅は、右から4.0cm・4.7cm・4.0cm・4.5cm・2.5cm・4.8cmを測り、桶巻造りである。側面は狭端から広端方向へのヘラケズリを施す。色調は淡青灰色。胎土は径5mm程の小石と砂粒をわずかに含む。焼成良好。9は、厚さ2.3mm、幅17.8cm、残存長さ25.3cmを測る。凸面は、3本あたり1.4cm×2.6cmの斜格子叩きを施した後、横方向のヘラケズリを施し部分的に叩きを残す。凹面は、3cmあたり27×20本の布目痕を残す。模骨痕を持ち、桶巻造りである。中央に二条の縦に走る指ナデが見られる。側面は狭端から広端方向へのヘラケズリを施す。色調は淡青灰色。胎土は径3~5mmの砂粒を含む。焼成良好。10は、厚さ2.5cm、幅20.8cm、残存長さ26.5cmを測る。凸面は、3本あたり1.4cm×2.2cmの斜格子叩きを施した後、横方向のヘラケズリを施し部分的に叩きを残す。凹面は、3cmあたり31×22本の布目痕を残し、模骨痕を持つ。模骨幅は、左から4.4cm・5.5cm・3.7cmを測り、桶巻造りである。狭端寄りのところに布のやぶれた部分がみられる。ほぼ中央で欠損しているが幅1.5cm程のところに指ナデを施している。色調は淡明褐色。胎土は微白色粒子を含む。焼成やや良好。11は、厚さ2.2cm、幅26.0cm、残存長さ23.0cmを測る。凸面は、斜格子叩きを施した後、横方向のヘラケズリを全面に施し部分的に叩きを残す。中央には粘土の合わせ目と思われる亀裂が見られる。凹面は、3cmあたり23×30本の布目痕を残し、模骨痕を持つ。模骨幅は、左から4.6cm・4.3cm・4.0cm・4.2cmを測り、桶巻造りである。右寄りのところに幅1.2cmの棒状工具によるナデの痕跡がみられる。また、右側端寄りのところに斜め方向に走る布の縫じ合わせがみられる。色調は淡褐色。胎土は微白砂粒子を含む。焼成良好。12は、厚さ1.7cm、幅



第18図 西戸丸山窯跡

15.6cm、残存長さ30.8cmを測る。凸面は、正格子叩きを施した後、横方向のヘラケズリを加え部分的に叩きを残す。凹面は、3cmあたり28×20本の布目痕を残し、模骨痕を持つ。模骨幅は、右から4.0cm・4.5cmを測り、桶巻造りである。右寄りのところに幅1.0cmの工具によるナデの跡がみられる。また、右側端には広端方向へのヘラケズリを施す。色調は灰色。胎土は微白砂粒子を多く含み5~10mmの石粒を若干混入させる。焼成良好。12は、厚さ2.2cm、幅24.8cm、残存長さ17.9cmを測る。凸面は、3本あたり1.2cm×2.2cmの正格子叩きを施した後、幅1.2cmの横方向のナデを加え部分的に叩きを残す。凹面は、3cmあたり30×24本の布目痕を残し、模骨痕を持つ。模骨幅は、左から4.5cm・5.0cm・4.5cm・4.5cmを測り、桶巻造りである。左寄りのところに綴じ幅3.2cmの布綴じ痕を持つ。また、左側端には広端方向へのヘラケズリを施す。色調は淡褐色。胎土は微白砂粒子、石英粒を含む。焼成良好。

年代

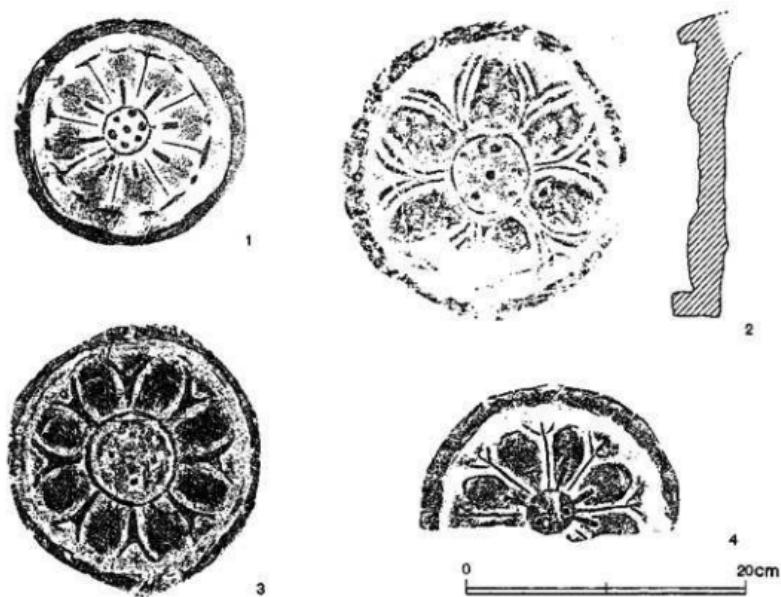
大谷瓦窯跡の単弁10葉軒丸瓦は、赤沼窯跡出土の同系の単弁8葉軒丸瓦に比べ古いとされている。年代としては、7世紀第3~4四半期にまたがる時期が想定されている。平瓦についてもいずれも凹面に模骨痕を持ち桶巻造りである。

(註) 酒井清治氏は、第14図5の籠書きされた文字を「奈你寺」と呼んでいる。これは、平川南氏に解説していただき、「寺」については、検討が必要であるという。

西戸丸山窯跡

立地と環境

西戸丸山窯跡は、越辺川左岸の丘陵部に位置しているとされるが、詳細は不明である。付近には西戸古墳群、川角古墳群などの後期末古墳群が存在するが、集落跡はほとんど確認されていない。



第19図 南比企窯跡群〔赤沼〕

鳩山興長寺とは約1kmの距離にある。

出土遺物（第18図）

軒丸瓦

複弁8葉蓮華文軒丸瓦の破片で瓦当部上半を欠損している。周縁は内傾する三角縁で、交叉鋸歯文が全周する。蓮弁はやや肉厚で、細隆線によって区画される。中房は欠損しているが蓮弁と同じくらいの高さと考えられる。推定中房径4.5cm。蓮子は不明である。瓦当裏面には一部糸切り痕を残し、周縁外側はナデによる調整が認められる。推定直径18cm。色調は暗青灰色～暗褐色で、胎土は砂粒を多量含む。

軒平瓦

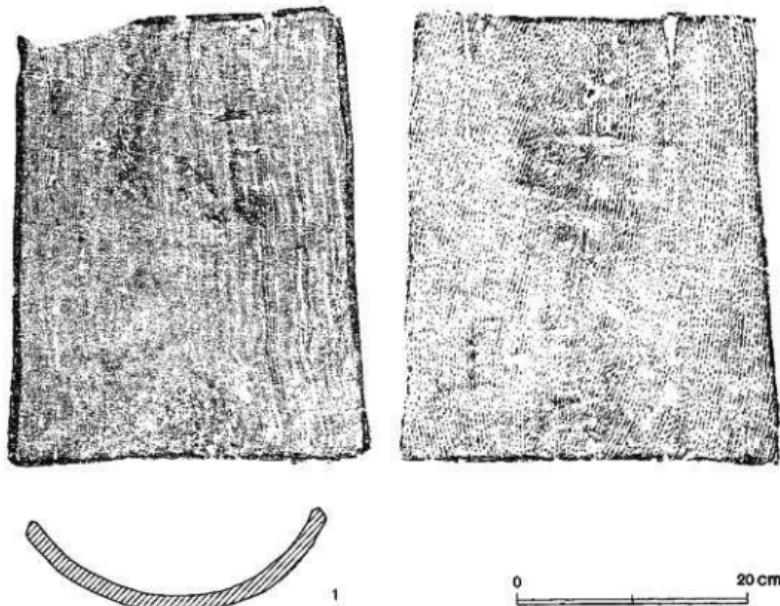
第1類

三重弧文軒平瓦の破片である。重弧文はヘラ書きによるものと思われる。

第2類

均正唐草文軒平瓦で左約半分を欠損している。唐草文は簡略化されて、子葉の巻込みも盛期のものに比べてやや雑である。中心飾りは蓮弁をあしらったものであるが、やや台座風なものになっている。外区は素文で、周縁の脇外区は上端に比べ下端を幅広く造り出している。頭は段頭で、瓦当裏面はナデ、平瓦凸面はヘラによって調整されている。色調は暗青灰色で、胎土に砂粒を含む。

平瓦



第20図 南比企窯跡群〔須江〕

4は凸面に正格子叩き、凹面には比較的細かい布目痕を残す平瓦の小破片である。

年代

複弁8葉蓮華文軒丸瓦は大久保領家庵寺、小用庵寺に同範例があり、8世紀後半～9世紀初頭とされる。均正唐草文軒平瓦は後出的で、墳の造りは中世的であるが、9世紀後半～10世紀代が考えられる。

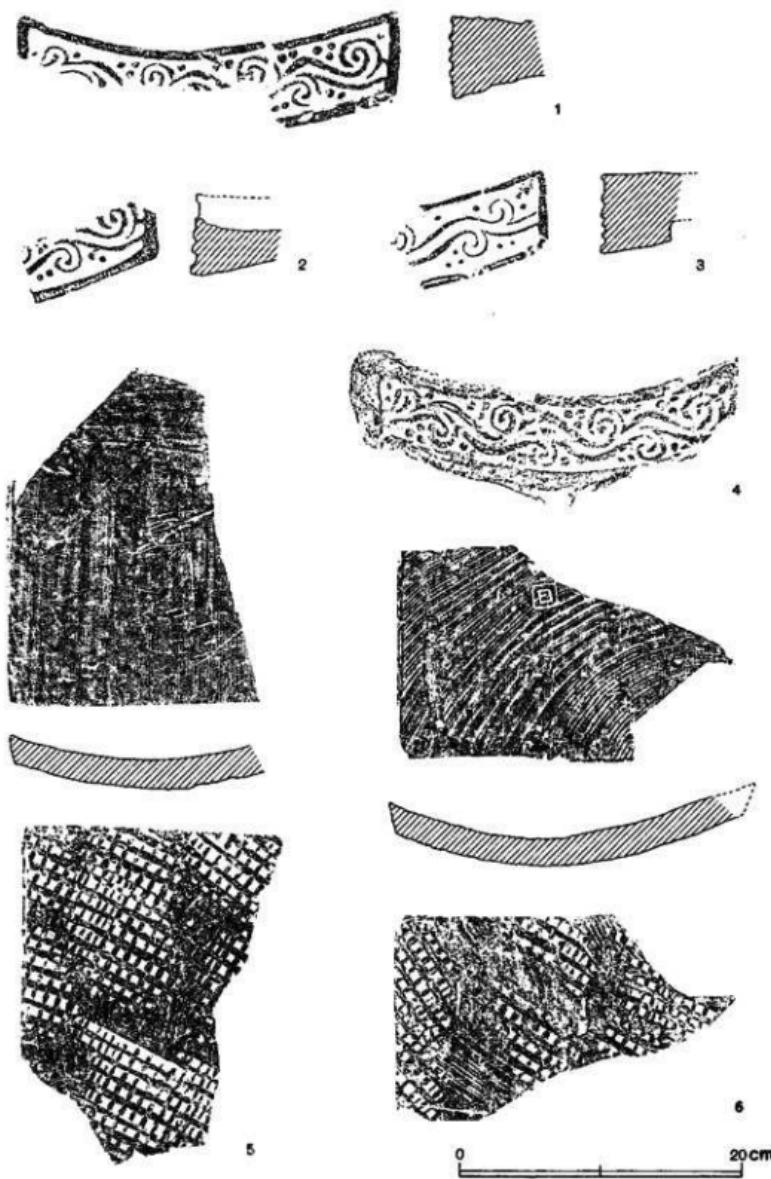
南比企窯跡群

立地と環境

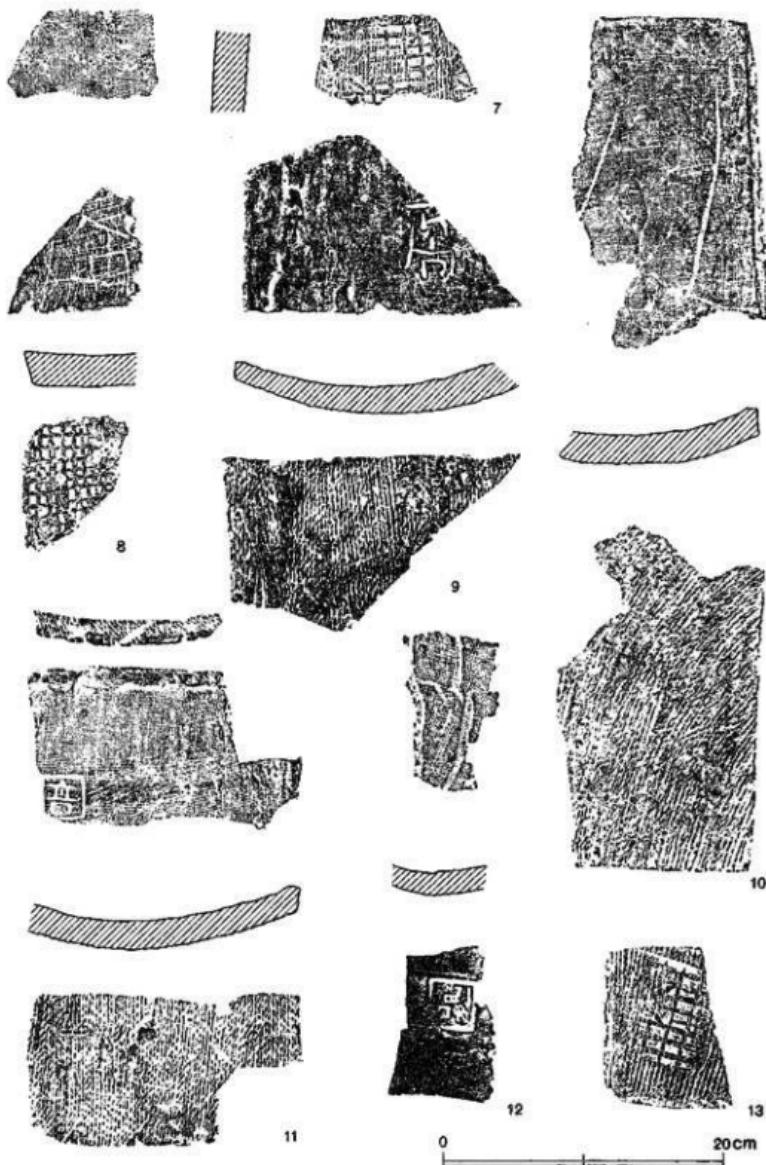
比企丘陵は、中央を西から東に流れる鳩川によってさらに南北丘陵に分けられる。本窯跡群は南北丘陵上に位置し、鳩山町須江を中心に玉川村と嵐山町の一部にまたがる大窯跡群である。窯跡群は鳩川とその支流によって開析された谷津および丘陵上の斜面に分布し、標高40m～110mを測る。主な周辺の遺跡は、東へ約3kmの高坂台地上に桜山・根平・舞台の窯跡群（6世紀前半～7世紀後半）が、南へ約1.5kmの所には小用庵寺（7世紀後半～8世紀初頭）、越辺川を越えた毛呂山町側約1.5kmの所には胴張りを有する石室を持つ善能寺古墳群がある。本窯跡群の詳細については、埼玉県立歴史資料館刊（1987）の『埼玉の古代窯業調査報告書』を参照されたい。

出土遺物

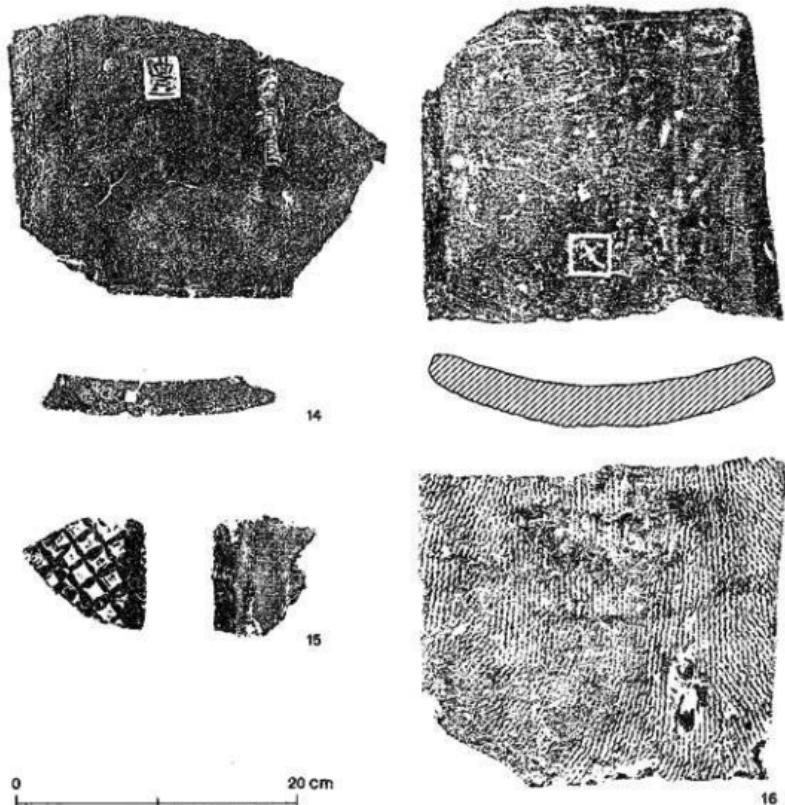
赤沼地区（第19図）



第21図 南比企窯跡群〔泉井〕(1)



第22図 南比企窯跡群〔泉井〕(2)



第23図 南比企窯跡群〔東井〕(3)

軒丸瓦

第1類

1は単弁8葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当面の直径は約16cm。3.2cmと小さめの中房には1+6の蓮子が配置されている。蓮弁には子葉が中央まで入る。

第2類

2は単弁6葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当面の直径は22cm、瓦当厚1.8cm~2.9cm、中房径5.5cmを測る。蓮弁は厚みを持ち、界線で画され、間弁がV字形に表現されている。中房の蓮子は1+5の配置である。瓦当周縁及び裏面は全面的に指でナデられている。色調は淡赤褐色を呈し、焼成はやや悪い。胎土には砂粒・雲母粒・石英粒を含有する。

第3類

3は単弁8葉蓮華文軒丸瓦で、瓦当面の直径は約18cm。中房径は6.6cmで、1+14の蓮子を配置する。

第4類

4は単弁8葉蓮華文軒丸瓦。蓮弁中央には子葉を持つ。間弁は凸線で表現され、先端で3方向に分かれる。中房径は3.3cmと小さい。

*2を除き柴田常恵氏資料のため詳細は不明

須江地区（第20図）

平瓦

1は凸面繩叩きを施す平瓦で、繩目は3cmあたり9本～10本である。長さ35.7cm、広端幅29.7cm、狭端幅26.5cm、厚さ1.4cm、弧深8.5cmを測る。凹面には3cmあたり23本～25本の布目痕を残し、側端部の凹面側は面取り状のケズリが施されている。

泉井地区（第21図～第23図）

軒平瓦

第1類

1・2・4は左から右へ流れる扁行唐草文を瓦当文様としている。1の凹面は指によるナデが凸面はヘラケズリが施されている。瓦当面の高さ5.9cm、弧高2.6cmを測る。色調は灰白色～青灰色を呈し、胎土には砂粒・石英粒を含有している。2の凸面はヘラケズリされ、瓦当面側は約1cm程横方向にナデられている。凹面側の剥離は、平瓦と額部の接合部分である。胎土には砂粒を含み、色調は青灰色を呈する。4は柴田常恵氏資料のため実測図はない。

第2類

3は扁行唐草文で、第1類と同様な文様構成であるが、唐草の位置、珠文の位置数が少し異なる。瓦当面の高さは5.7cm、額の幅は4.9cmを測る。凹凸面はともにヘラケズリが施されている。額は段顎で、平瓦との接合部に至る段は指でナデられている。胎土には砂粒を含み、色調は褐色～青灰色を呈する。

平瓦

第1類

5・6・8は凸面に格子叩きを施しているが、全面には及んでいない。凹面はいずれも布目痕を残すが、5は部分的に指で消されている。また6では「日」の押印と糸切り離し痕が認められる。

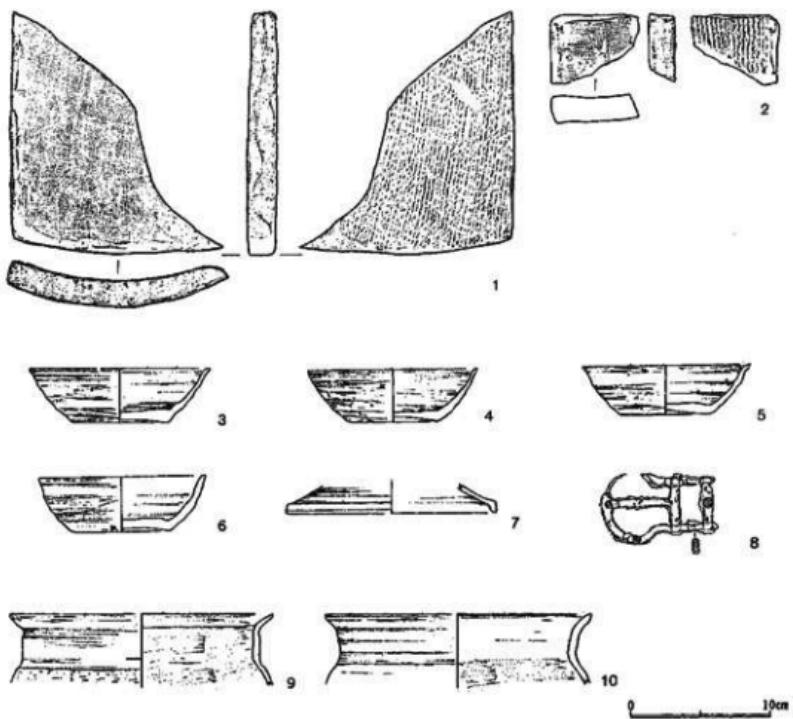
5の布目は3cmあたり23本である。胎土には砂粒を含み、色調は灰白色を呈する。6の布目は3cmあたり30本と細かい。胎土には砂粒を含み、色調は青灰色を呈する。8は胎土に砂粒を含み、色調は暗褐色から青灰色。

第2類

15は第1類と同様に凸面正格子叩きであるが、第1類の格子が矩形であるのに対し、正方形に近く、より大形である。布目は3cmあたり26本である。

第3類

7・13は凸面に繩叩きを施した後、部分的に文様正格子（文様格子の一部を×印に変えている例）



第24図 岩の上遺跡

で叩いている。7は胎土に砂粒を含み、色調は灰色を呈する。布目は3cmあたり24本である。

第4類

9・10・11・16は凸面に繩叩きを施しているもので、繩目はいずれも3cmに9本～10本である。9・11・16には凹面に文字（9は「高」の範描き、11は「高」の押印、16は「父」の押印）が認められる。9は布目が3cmあたり27本、胎土には砂粒を含み、色調は青灰色を呈する。10は布目が3cmあたり24本～30本で、側端方向に布が伸びており、布目の間隔が広い。胎土には砂粒・白色砂粒を含み、色調は青灰色を呈する。11の布目は3cmに19本～24本で、狭広端方向に布が伸びている。広端部には繩叩きが施されている。胎土には砂粒・白色砂粒を含み、色調は青灰色を呈する。16の布目は3cmあたり20本、胎土には砂粒を含み、色調は青灰色を呈する。

第5類

12は小破片ではあるが、凸面無文。凹面の布目は3cmあたり21本～24本で、狭広端両方向に布が伸びている。凸面の押印は「白方瓦」。胎土には砂粒・白色砂粒を含み、色調は青灰色を呈する。

*14は文子瓦で、凹面に、「～部古真良」の箋書きと「豊」の押印、端部には「川頭」の箋書きが認められる。柴田常恵氏資料。

年代

本窯跡群において最も古い時期に考えられているのは、赤沼地区-1の軒丸瓦である。単弁8葉に棒状の子葉を付加するタイプで、坂野和信氏は7世紀第3四半期に4を7世紀終末に位置づけている(坂野、1982)。しかし酒井清治氏は1の年代を8世紀第1四半期としている(酒井、1987)。両者の間にある半世紀という年代観の開きは大きい。ここでは7世紀後半として、結論を保留しておきたい。2・3は9世紀第2四半期で、6葉となる2は3より後出となる可能性がある。泉井地区出土の軒平瓦は、1・2・4が同範で、8世紀末～9世紀初頭、3は9世紀第2四半期の年代が与えられている。平瓦に関しては9世紀中葉と考えられよう。

第3節 集落・その他の遺跡

岩の上遺跡

立地と環境

岩の上遺跡は東松山市大字石橋字岩のJ地内に所在する。遺跡は松山台地南縁に立地する。標高は約43mで、水田面との比高差は約12mである。台地の南側には都幾川が東流している。調査は国道254号バイパス工事に伴って、昭和47年度に埼玉県教育委員会によって行なわれている。内容は绳文時代の住居跡23軒、歴史時代の住居跡8軒等が検出されている(野部他、1973)。

周辺には青島古墳群、附川古墳群、若宮八幡古墳、青川古墳などがある。集落跡では雉子山遺跡、塙原遺跡などが知られている。

出土遺物(第24図)

平瓦(1・2)

凹面は布目痕が残る。凸面には繩叩き痕が残る。側端はヘラケズリされる。1の色調は黄褐色から灰褐色、2の色調は暗灰色である。

土器

3～6は壺。3～5は口唇部が外反する。ロクロ成形で底部は回転糸切りである。胎土は精選され焼成も比較的良好。6は器厚が厚く口縁はやや内湾気味である。ロクロ成形。底部回転糸切り。胎土は小礫を多量に含む。色調は暗灰色。焼成不良。7は蓋。天井部欠損。受部は鋭く直立する。内面に煤が付着している。8・9はコの字状口縁を呈する甕である。10は鉢金貝。住居跡覆土上層からの出土である。

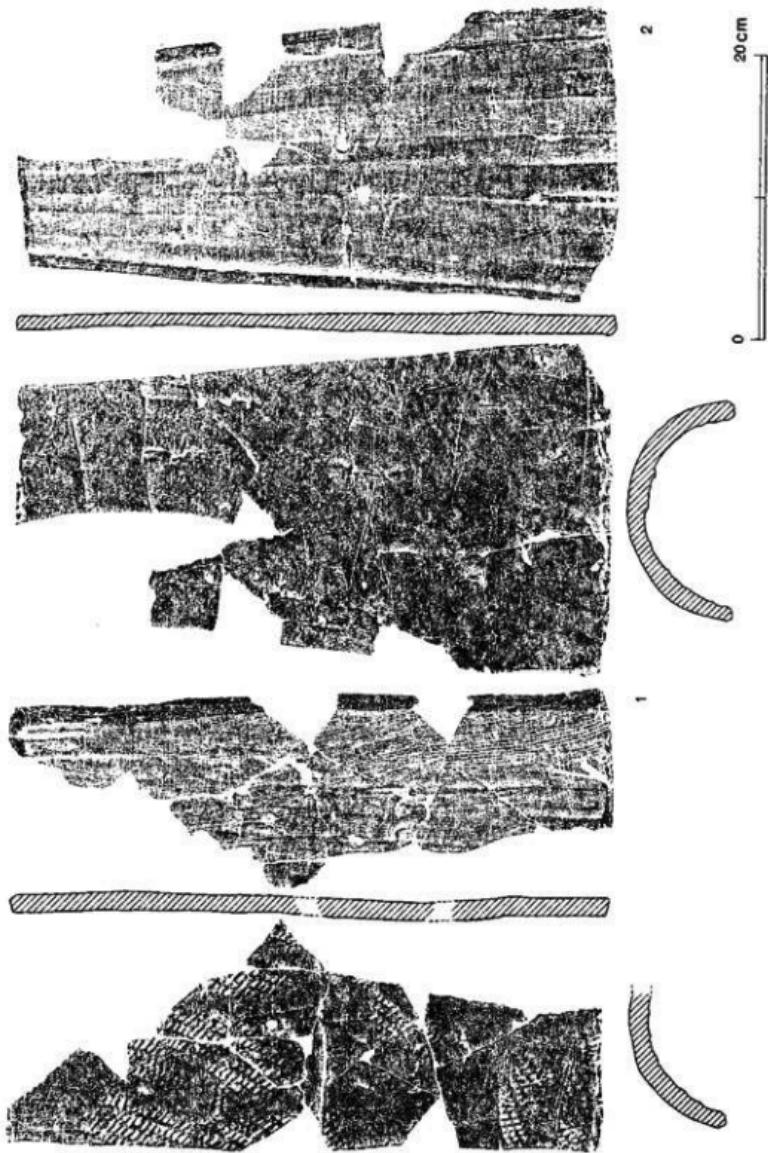
年代

住居跡から伴出している遺物から9世紀前半と考えられる。

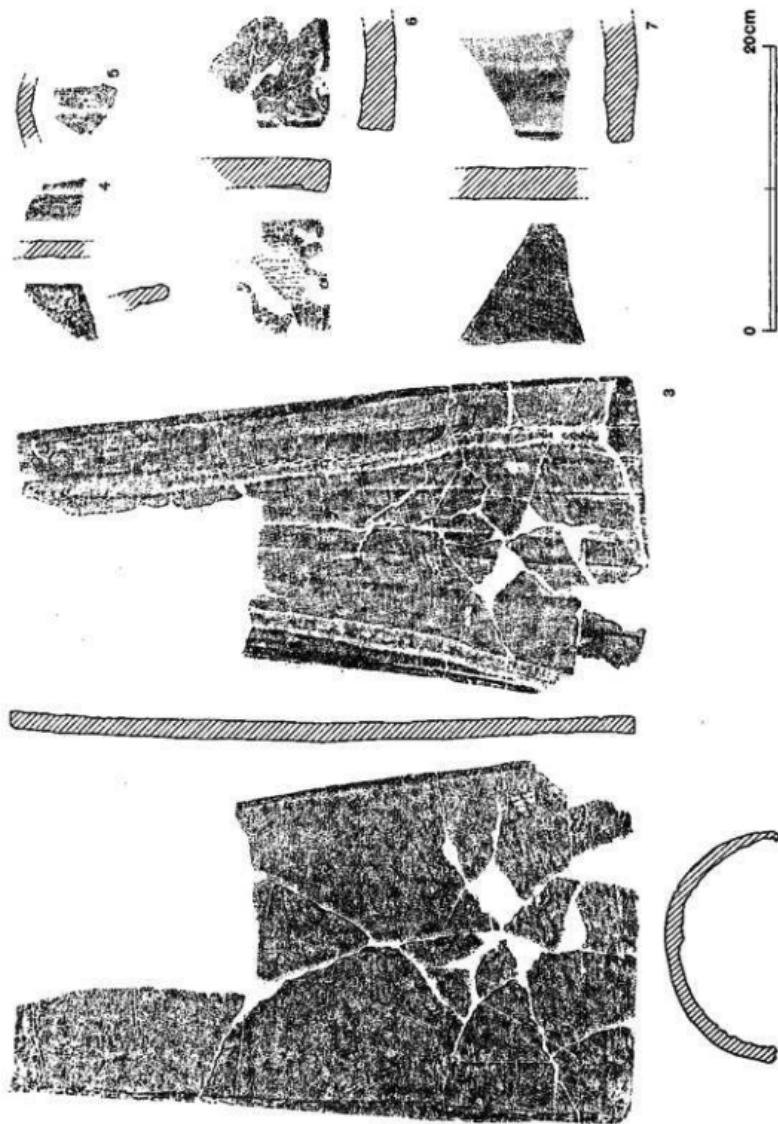
緑山遺跡

立地と環境

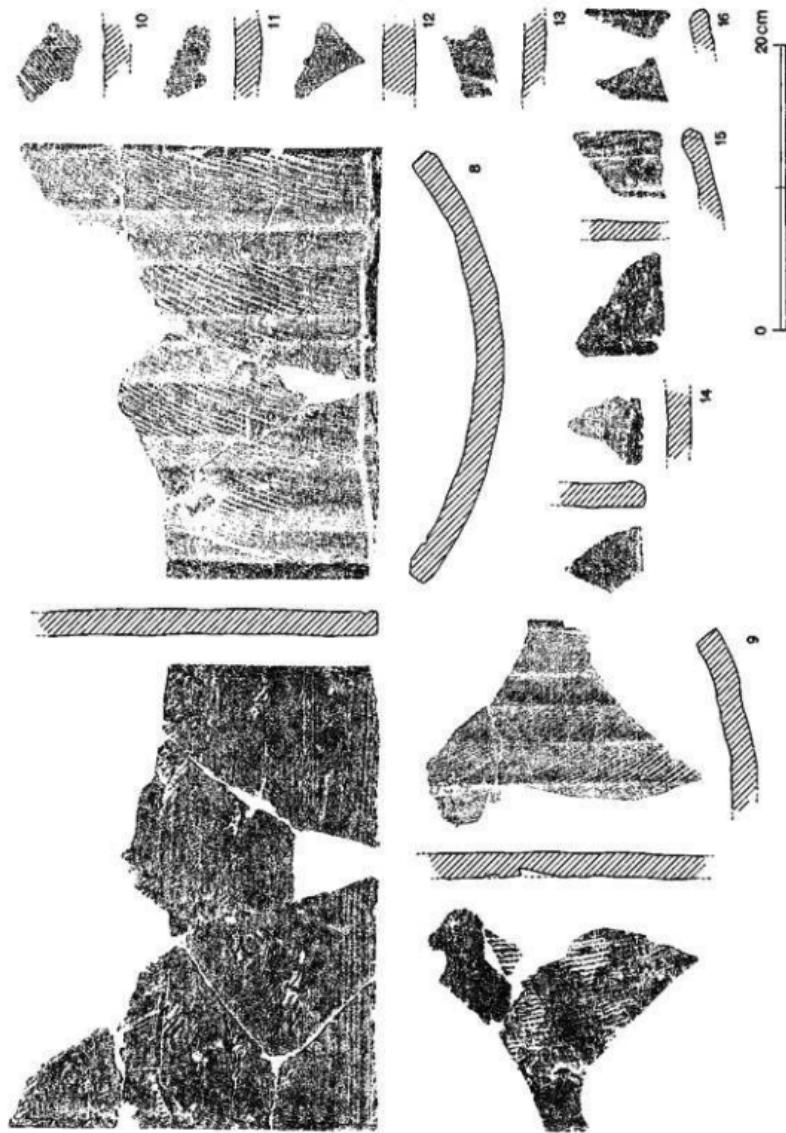
緑山遺跡は、東松山市大字田木字緑山に所在する。物見山丘陵から東へ派生する小支丘上に位置する。標高は68mで沖積地との比高差は45mである。遺跡の南には越辺川が東流する。調査は昭和



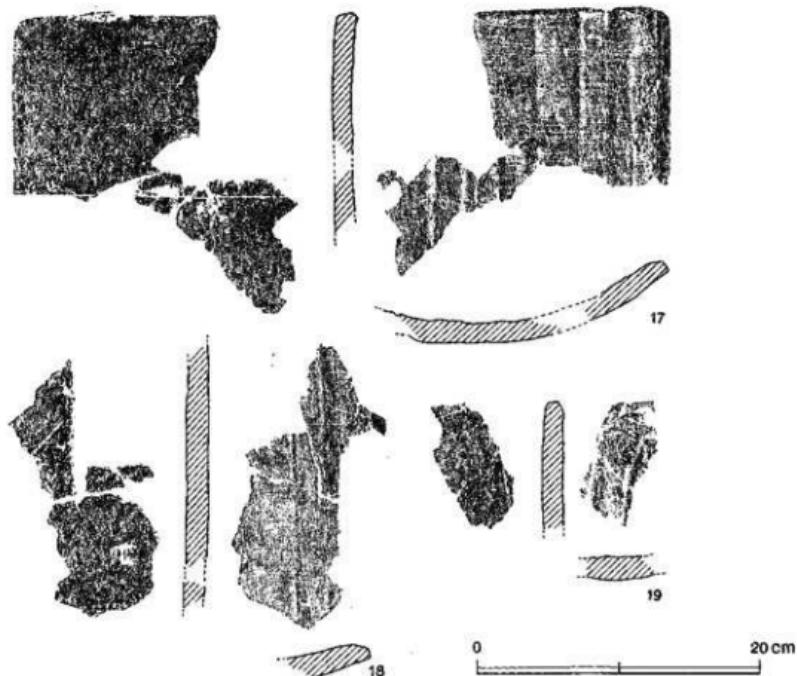
第25図 緑山遺跡(1)



第26図 緑山遺跡(2)



第27図 緑山遺跡(3)



第28図 緑山遺跡(4)

53年度に行なわれた。住居跡4軒と土壙が検出されている。他は縄文時代の遺構である。周辺には多くの遺跡が散在する。古墳では桜山古墳群、諏訪山古墳群、高坂古墳群、毛塚古墳群などがある。集落では駒堀遺跡、田木山遺跡、舞台遺跡、根平遺跡、立野遺跡などがある。窯跡も多く桜山窯跡、根平窯跡、舞台窯跡、小用窯跡がある。また少し離れて赤沼瓦窯跡と勝呂庵寺が存在する。

出土遺物（第25～28図）

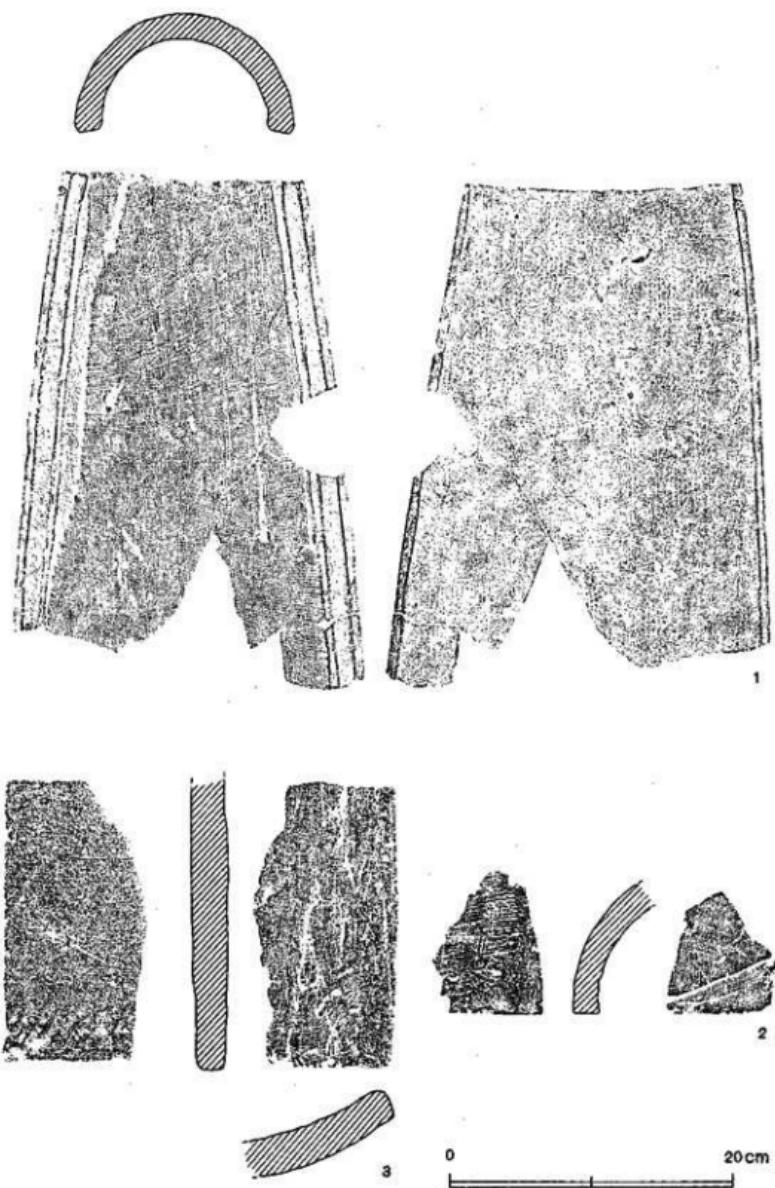
丸瓦

1～5は、凸面に格子叩きを施した後、横方向にヘラナデされる。凹面には模骨痕及び布目痕が残る。1には糸切り痕も見られる。3では布の重ね痕が観察される。胎土はいずれも白色針状物質を含む。焼成は1・3・4・5は普通、2は良好である。

平瓦

第1類

8・15・17・18は、凸面に格子叩きを施した後、ヘラナデを行うものである。このうち8・17・18は長方形の格子に斜行を加えたものである。8は叩きの上に幅約6cmのヘラ整形痕が残る。凹面は広端部から右側端部に抜ける糸切痕が残る。その上に模骨痕及び布目痕がある。15・17・18もほ



第29図 愛宕通遺跡(1)

は同様で、凹面には模骨痕及び布目が残る。厚さは1.3cm~1.7cmである。胎土はいずれも白色針状物質を含み8は砂粒、微砂粒を多量に含む。他は砂粒、角閃石を含む。焼成は普通である。

第2類

6・7・9は、凸面平行叩きの後、横方向にヘラ整形するものである。凹面は模骨痕及び布目が残る。7・9は糸切り痕が認められる。厚さは1.5cm~2.2cmである。胎土は6・9は白色針状物質を含み、さらに6は白色粒、砂粒、7は砂粒、9は砂粒、黒色微細粒を含む。

第3類

凸面が横方向にヘラ整形されるものである。細片のため第1類あるいは第2類に含まれる可能性もある。凹面はいずれも布目痕が残る。14、19には模骨痕が見られる。胎土は白色針状物質を含み、16は砂粒、14、19は砂粒と角閃石を含む。焼成は14、16が良好、19は普通。

年代

縁山遺跡出土の瓦は丸瓦と平瓦であるが、これらはその技法等から勝呂廃寺の瓦と類似点が極めて多いとされる。その時期を8世紀第1四半期頃に比定している(酒井、1982)。

愛宕通遺跡

立地と環境

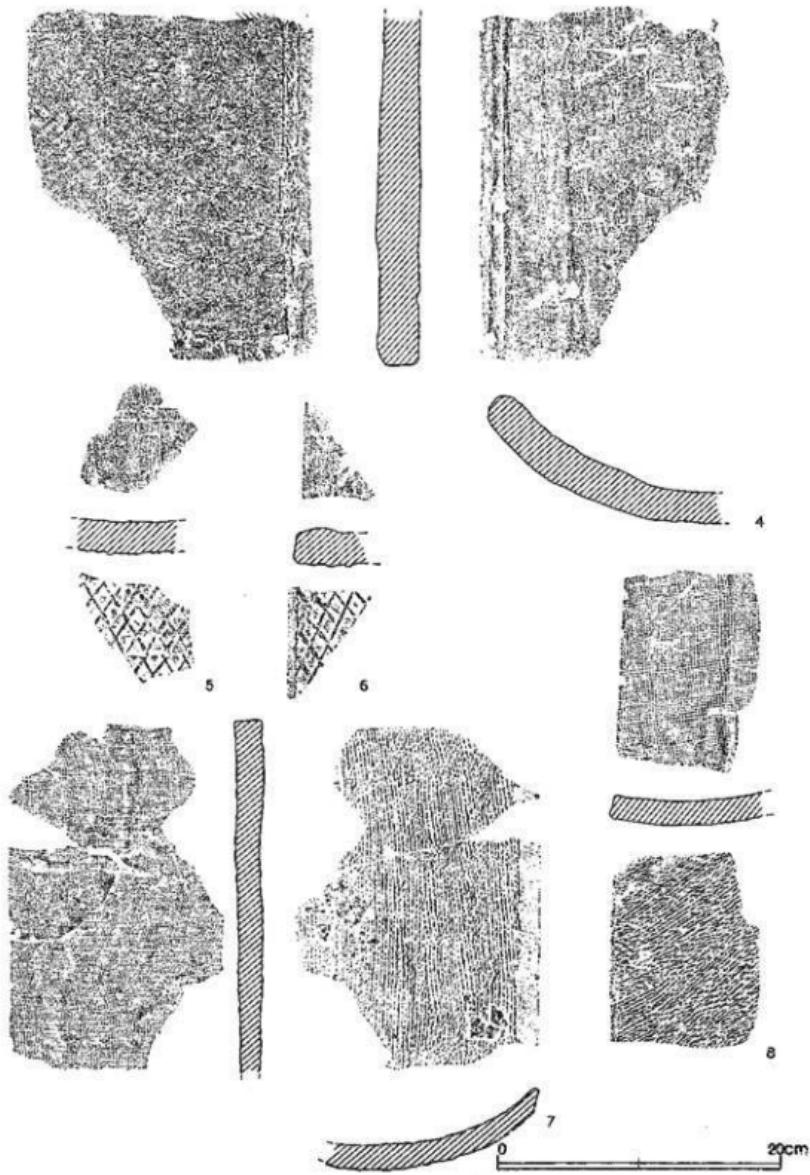
愛宕通遺跡は、行田市大学埼玉字愛宕通に存在する。遺跡は埼玉古墳群、若王子古墳群、旧盛徳寺などを含む低台地上に立地する。この低台地は現在埋没しており、大部分が水田となっている。標高は16m前後である。遺跡の北側には旧忍川が東流している。旧忍川は行田市街の東側で忍川から分岐したものであり、現在の忍川は行田市街から南に流れている。

調査は県道の拡幅工事に伴って昭和58年に実施された。若王子古墳群の一部と見られる古墳跡3基、平安時代の住居跡25軒などが検出されている(瀧瀬、1985)。

周辺には多くの遺跡が存在する。古墳時代の集落では五領期の池上遺跡、池守遺跡、白鳥田遺跡、和泉期では鴻池遺跡、武良内遺跡、小針北遺跡、高畠遺跡、鬼高峰期では長野中学校校内遺跡、渡柳陣場遺跡、吹上町袋・台遺跡、高畠遺跡等がある。奈良、平安時代の集落としては原遺跡、野合遺跡、長野中学校校内遺跡、池上遺跡、小敷田遺跡、白鳥田遺跡、小針遺跡などがある。

古墳群も多く存在する。遺跡の西側には埼玉古墳群が存在し、さらに現在は消滅している若王子古墳群がある。若王子古墳は全長95mの前方後円墳で1906年に発掘され、甲冑残片、馬具、刀剣断片、高壙などが検出された。年代は7世紀前後に求められている。若王子古墳群の年代は6世紀初頭から7世紀初頭とされる(瀧瀬、1985)。旧忍川を挟んだ北側には若小玉古墳群がある。若小玉古墳群には地蔵塚古墳、愛宕山古墳、八幡山古墳などが含まれている。地蔵塚古墳は一辺約28m、高さ約4.5mの方墳で切石を用いた横穴式石室を持つ。側壁には人物、馬、水鳥、家などと思われる線刻画が描かれている。

年代は古墳北側の周掘が鬼高峰期の住居跡を切っていることから、それ以降であることが知られている(埼玉県史、1982)。八幡山古墳は直徑74mの円墳と想定され、横穴式石室を持つ。封土は失われているが石室は復原されている。石室は三室に分かれ全長は羨道を含めて16.7mと推定されている。築造年代は7世紀中葉から後半と考えられている(埼玉県史、1982)。若小玉古墳群の北方には



第30図 愛宕通遺跡(2)

小見真觀寺古墳がある。全長112mの前方後円墳で2基の横穴式石室がある。1基が明治13年に調査され、武具類、金環、蓋付有脚銅鏡などが検出されている。年代は7世紀中ごろから後半代と考えられている(文部省、1935)。

遺跡の南には旧盛徳寺がある。ここでは25個の礎石が確認されているが、いずれも既に移動している(藤島亥治郎、1963)。寺域については『埼玉県史』と『行田市史』で若干異なった見解が示されている。出土した瓦は軒平瓦で3種類見られ、8世紀第1四半期から鎌倉中期までに亘る。

出土遺物(第29図～第31図)

丸瓦

1は凸面は縄叩きの後、全面横方向のナデが施される。凹面は糸切り痕及び布目痕が残る。また、布のとじ合せ痕が明瞭に残る。側端面は凹凸両面とも面取りされる。現存長約45cm、狭端部幅13cm、厚さ1.7～1.9cmを測る。胎土は砂粒を少量含む。焼成は良好。色調はにぶい黄褐色を呈する。2は色調が青灰色を呈する他は1と類似する。

平瓦

第1類

凸面にナデを施すものである。4は凸面全面に横方向のナデを施す。凹面には幅約4cmの模骨痕及び布目痕が残る。側端部は面取りを行う。厚さは2.1～2.9cmである。胎土は砂粒を多く含む。焼成はやや良好で色調は暗青灰色を呈する。3は凸面に不定方向のナデが施されるが、斜格子の叩きがわずかに残る。凹面には幅約5cmの模骨痕及び布目痕が残る。厚さは2.0～2.5cmである。胎土、焼成、色調は4に類似する。

第2類

凸面に斜格子の叩きを施すものである。5・6ともに凸面に斜格子の叩きが見られ、凹面には布目痕が残る。また、図示したほかの破片では模骨痕が観察できる。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は5が青灰色、6が暗青灰色を呈する。

第3類

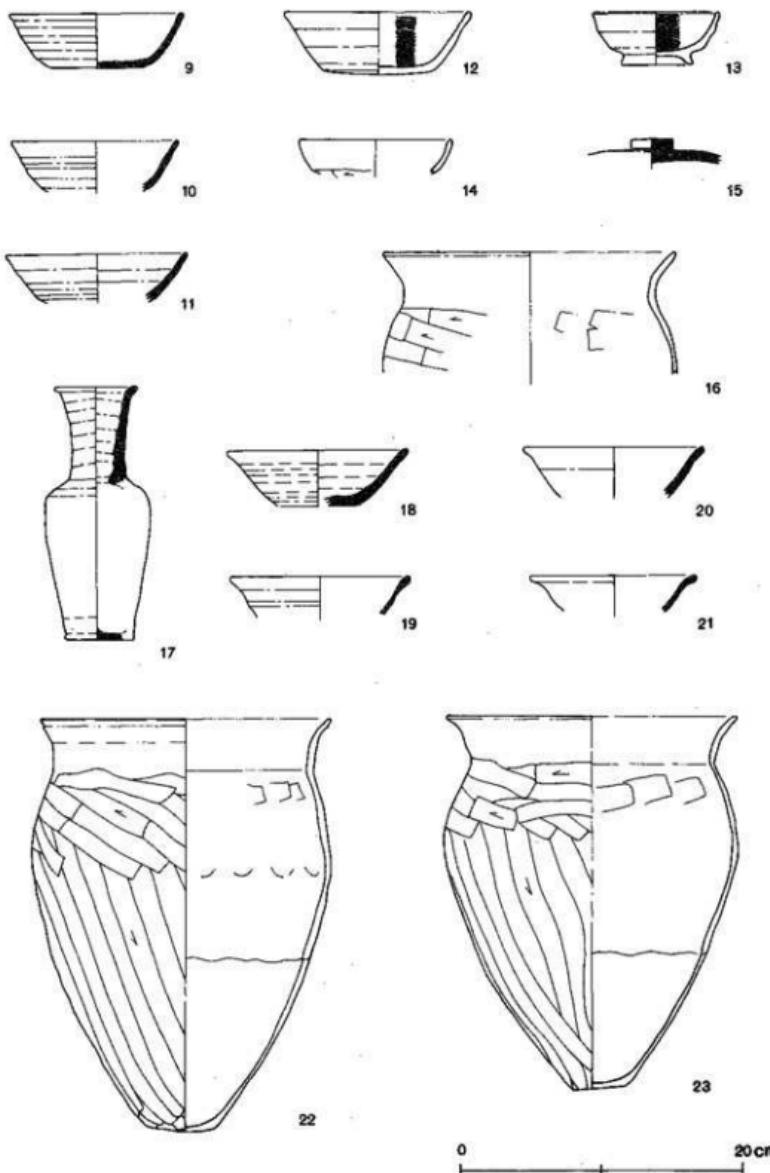
凸面に縄叩きを施し、凹面には模骨痕を持つものである。8は凸面の繩目は3cmあたり12本である。凹面は布目痕及び模骨痕が残る。厚さは1.7cmである。胎土は砂粒をほとんど含まない。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。

第4類

凸面に縄叩きを施し、凹面には模骨痕の見られないものである。7は凸面の繩目は3cmあたり11本である。凹面は布目痕が残る。側端面は鋭角に面取りされる。

厚さは1.4～1.9cmである。胎土は砂粒と白色針状粒子をわずかに含む。焼成は良好で暗青灰色を呈す。

上器 9～16は第1号住居跡から出土したものである。9～11は須恵器壺である。9は口径12.5cm、底径6.5cm、器高3.9cmで底部は回転糸切りである。胎土は長石、石英、白色針状物質を含む。焼成は良好で色調は緑灰色を呈す。10は推定口径12cm、11は同じく13cmで胎土は9と同様である。いずれも南北企座である。12、14は上器壺。12は推定口径13.5cm、推定底径8cm、器高4.5cm。内



第31図 愛宕通遺跡(3)

面黒色処理及び細かい磨きを施す。底部へラケズリ。砂粒少量含みにぶい褐色を呈す。焼成は不良。14は推定口径11cm。外面体下部へラケズリ。砂粒及び雲母を含む。色調は橙色で焼成は良好である。13は土師器台付焼口径9.3cm、底径5.2cm、器高3.9cm。内面黒色処理及び細かい磨きを施す。底部ナデ。砂粒を少量含む。黄灰色。焼成良好。15は須恵器蓋である。天井部はヘラケズリされる。つまみは扁平である。長石、石英、白色針状物質を含む。灰色。焼成普通。16は土師器壺。推定口径21cm。口縁はゆるいコの字状を呈する。外面へラケズリ、内面へラナデ。砂粒、長石、角閃石、雲母を含む。にぶい褐色を呈し焼成は不良。17~23は第13号住居跡からの出土である。17は須恵器長頸瓶。口径6cm、底径5cm、器高18cm、底部は回転糸切りである。胎土は砂粒、長石、石英、角閃石を含む。にぶい褐色で焼成は不良。18~21は須恵器壺である。18は推定口径13cm、推定底径6cm、器高4cm。底部は回転糸切りで胎土は砂粒多く、長石、石英を含む。灰褐色で焼成良好。19は推定口径13cm、青灰色で焼成は良好。南北企座である。20はにぶい褐色を呈し焼成は良好。木野座である。21は砂粒、長石、石英を含み明褐色。焼成は良好。22、23は土師器壺。いずれも口縁はコの字状で胴上部は横方向、下部は縦方向のヘラケズリを施す。底部は一方向のヘラケズリである。22は口径20.8cm、底径5.0cm、器高29.5cm、砂粒少量、長石、角閃石、雲母、赤色粒子を含む。赤褐色、焼成良好。23は口径20.8cm、底径3.7cm、器高26.7cm、胎土は22とほぼ同じで他に石英を含む。明褐色、焼成良好。

年代

瓦の年代は資料の3・5・6は1号住居跡のカマドの袖として、同じく4は13号住居跡のカマドの袖に使用されていたものである。1号住居跡は9世紀第1四半期、13号住居跡は9世紀中頃の年代が与えられている(瀧瀬、1985)。また、これらの瓦はすぐ南に位置する旧盛徳寺で主に使用されていたものと考えられるが、旧盛徳寺出土の瓦については8世紀第4四半期からの年代が与えられている。

奈良瀬戸遺跡

立地と環境

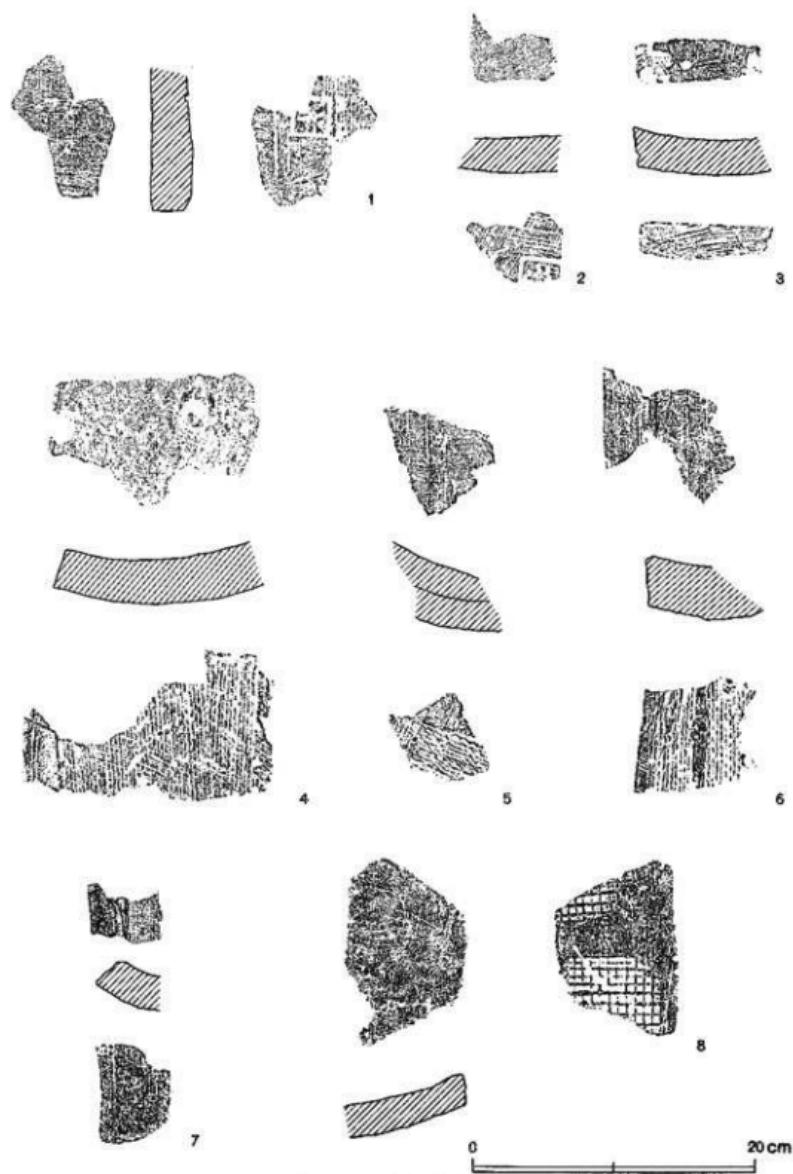
奈良瀬戸遺跡は、大宮市奈良町149番地に所在する。遺跡は、東西巾200m程の南北に狭長の大宮台地の一小支丘上に形成され、西に鴨川の流れる低地を控え、北及び東にも水田が広がる。台地の標高は約15mで、水田との比高差は5mを測る。

出土遺物(第32図)

奈良瀬戸遺跡出土の瓦は発掘調査時にトレンチから出土しており、いずれも平瓦の小破片である。このうち1・2は文字瓦である。

第1類(1~7)

1は、厚さ2.7cm、幅5.4cm、長さ9.6cmを測る。凸面は、非常に細かい平行叩きを全面に施した後、部分的に潤叩きを施す。文字は、判読不明であるが一辺3.1cmの大きさの刻印である。凹面は、3cmあたり25×24本の布目痕を残す。端面は、幅2.0cmで右側から左側方向へのヘラケズリを施し凹面側も幅0.7cmをヘラケズリしている。色調は黒灰色。胎土白色粒子を多く含みやや粗雑である。焼成やや良好。2は、厚さ2.5cm、幅5.1cm、長さ6.9cmを測る。凸面は、非常に細かい平行叩きを全面



第32図 奈良瀬戸遺跡

に施した後、部分的に繩叩きを施す。文字は、判読不明であるが一辺3.1cmの大きさの刻印である。凹面は、3cmあたり24×27本の布目痕を残す。色調は灰白色。胎土白色粒子、不透明黒色粒子、赤褐色粒子を含み緻密。焼成は良好。3は、厚さ2.9cm、幅9.0cm、長さ2.9cmを測る。凸面は、非常に細かい平行叩きを全面に施す。凹面は、3cmあたり横は14本の布目痕を残す。色調は灰白色。胎土は白色粒子、不透明黒色粒子、赤褐色粒子を含み緻密。焼成は良好。4は、厚さ3.3cm、幅15.0cm、長さ10.4cmを測る。凸面は、非常に細かい平行叩きを全面に施した後、部分的に3cmあたり10×7本の繩叩きを施す。凹面は、3cmあたり25×23本の布目痕を残す。左側面及び凹面に浅く窪む沈線を持つ。色調は灰褐色。胎土は白色粒子、不透明黒色粒子、赤褐色粒子を含み緻密。焼成は普通。5は、厚さ4.5cm、幅6.3cm、長さ5.7cmを測る。凸面は、非常に細かい平行叩きを全面に施した後、部分的に3cmあたり10×7本の繩叩きを施す。凹面は、3cmあたり23×22本の布目痕を残す。断面の割れ口を観察すると粘土板を二枚合わせて作られている。色調は灰白色。胎土は白色粒子、不透明黒色粒子、赤褐色粒子を含み緻密。焼成は良好。5は、厚さ3.8cm、幅8.3cm、長さ7.7cmを測る。凸面は、非常に細かい平行叩きを施した後、3cmあたり12×5本の繩叩きを施す。凹面は、3cmあたり28×25本の布目痕を残す。左側面及び凹面の一部にヘラケズリを施す。色調は淡灰褐色。胎土は白色粒子、不透明黒色粒子を含み、若干の赤褐色粒子を混在させ緻密である。焼成はやや良好。6は、厚さ2.5cm、幅5.0cm、長さ7.1cmを測る。凸面は、丁寧なナデを施す。叩きの有無は不明である。凹面は、3cmあたり27×18本の布目痕を残す。左側面及び凹面の一部にヘラケズリを施す。色調は灰褐色。胎土は白色粒子、酸化鉄粒子を含み緻密である。焼成良好。

第2類

8は、出土地が不明である。側ヶ谷戸遺跡出土瓦（第33図5）に格子叩きの大きさが非常に類似している。厚さ2.4cm、幅8.8cm、長さ13.2cmを測る。凸面は、丁寧なナデを施した後、3本あたり1.9cm×2.0cmの正格子叩きを施す。凹面は、3cmあたり21×26本の布目痕を残す。左側面にヘラケズリを施す。色調は灰褐色。胎土は白色粒子、砂粒子を含み粗雑である。焼成はやや良好。

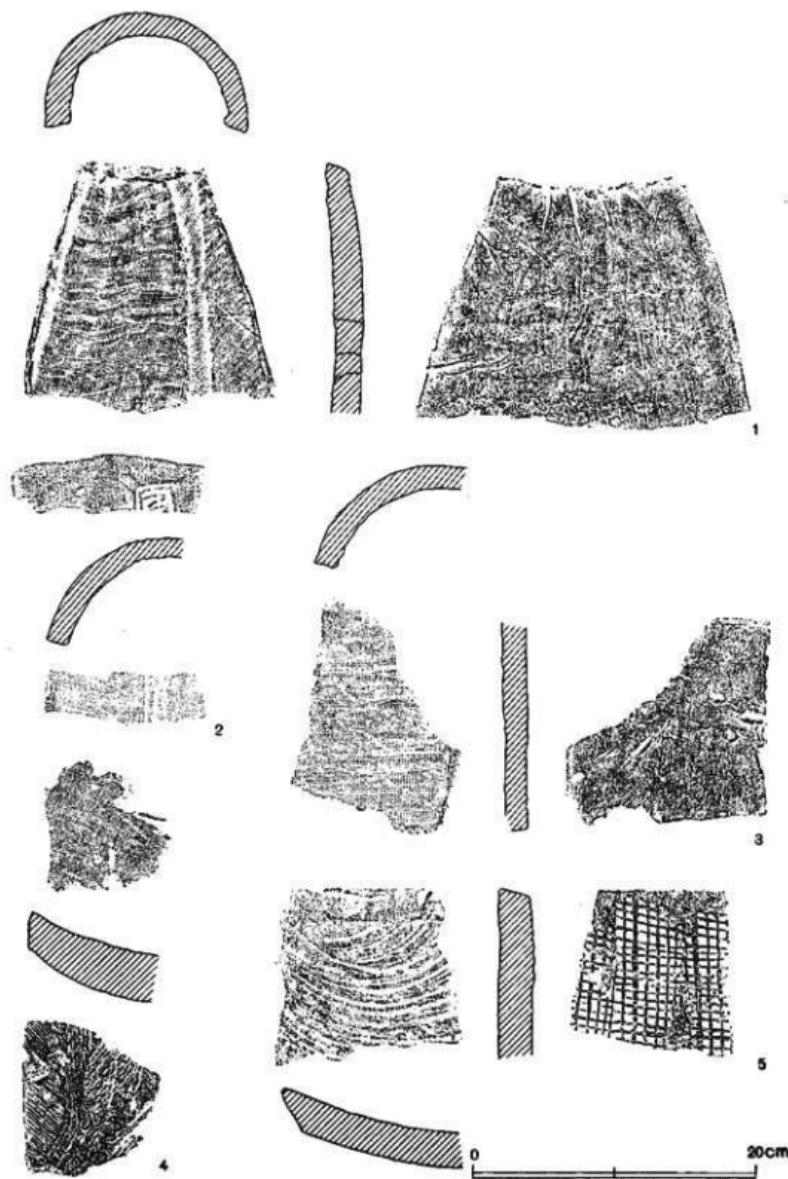
年代

奈良瀬戸遺跡出土の瓦には、「安」の刻印された郡名瓦が出土している。また、平瓦の叩きは繩叩きであり側ヶ谷戸遺跡と類似している。年代としては、9世紀前半を考えたい。

側ヶ谷戸遺跡

立地と環境

側ヶ谷戸遺跡は、大宮市三橋四丁目に所在する。大宮台地の一枝台である。日進・与野支台の先端部にあたり鶴川が荒川に注ぐ開口部左岸に位置する。ここには、北から稻荷塚古墳・茶臼塚古墳・山上山古墳・上之稻荷古墳・中郷古墳・台耕地稻荷塚古墳の各円墳が築造され側ヶ谷戸古墳群を形成している。標高は約10mを測る。周辺には、荒川下流域左岸の細長い自然堤防上に、植水古墳群・白銀古墳群・大久保古墳群・土合古墳群が所在し、さらに、土合古墳群から約6m下流の自然堤防上に戸田山南原古墳群が築造されている。また、これらの古墳群の西方には、大久保条單の存在が知られている。



第33図 倭ヶ谷戸遺跡

出土遺物（第33回）

瓦は、いずれも表探資料である。表探地点は、稻荷塚古墳の南西の接した場所である。

丸瓦

1～3は丸瓦である。1は、厚さ1.6cm、直径14.6cm、長さ17.9cmを測る。凸面は、部分的に縄叩きを施し、その後に全体にケズリを加え縄叩きを消している。凹面は、3cmあたり18×19本の布目痕を残し、中央右寄りに「Z」型の布とじが明瞭に観察される。狹端面はナデを施し、側面は狹端から広端方向へのヘラケズリを施す。胎土は緻密で、粘性を持ち白色透明粒子を混入。色調は青灰色で還元焰焼成である。2は、郡名瓦である。凸面には足立郡の「足」の一部が押されている。刻印は、一辺3cmを測る。厚さ1.7cm、幅12.4cmを測る。凸面は、部分的に縄叩きを施しその後にナデを施す。凹面は3cmあたり24×29本の細かい布目痕を残し模骨痕跡を持つ。側面は、両方向へのケズリを施す。割れ方から粘土組造りと考えられる。色調は灰白色。胎土は白色粒子を含み緻密である。3は、厚さ1.7cm、幅12.9cm、長さ14.6cmを測る。凸面は側面方向に向けての縦方向及び斜め方向の細かい平行叩きの後、単位が不明瞭でつかめないが縄叩きを部分的に施す。凹面は3cmあたり17×20本の布目痕を残す。側面は、広端方向へのケズリを施す。色調は暗褐色。胎土は緻密で粘性をもち砂粒子、白色不透明粒子を混入する。

平瓦

4・5は、平瓦である。4は、厚さ3.5cmとかなり厚く、幅9.9cmを測る。凸面は側面方向に向けての縦方向及び斜め方向の細かい平行叩きの後、部分的に縄叩きを施す。凹面は3cmあたり23×24本の布目痕を残す。色調は白灰色。胎土は緻密で粘性を持ち砂粒子、白色不透明粒子を混入する。5は、厚さ2.5cm、幅11.5cm、長さ11.4cmを測る。凸面は3本あたり1.7cm×2.0cmの正格子叩きを全面に施す。凹面は糸切り痕を明瞭に残し、その後に、3cmあたり21×18本の布目痕を残す。側面は狹端方向へのヘラケズリを施し、狹端面はケズリの後ヨコナデを加えている。また、狹端側の凹面はやや段を持ち膨らみ、端部はさらに肥厚している。一枚造りと考えられる。色調は黒褐色。胎土は径0.5cm程の小石を含み白色粒子、砂粒子を多く混入しやや粗い。

側ヶ谷戸遺跡出土の瓦のうち1～4については、いずれも凸面に板状工具によって細かい平行叩きを全体に施した後に、部分的に縄叩きを施す。こうした調整方法は、奈良瀬戸遺跡出土の瓦にも見られ、また、正格子の叩きを持つ瓦も同類の可能性があり両遺跡の関連性が窺える。

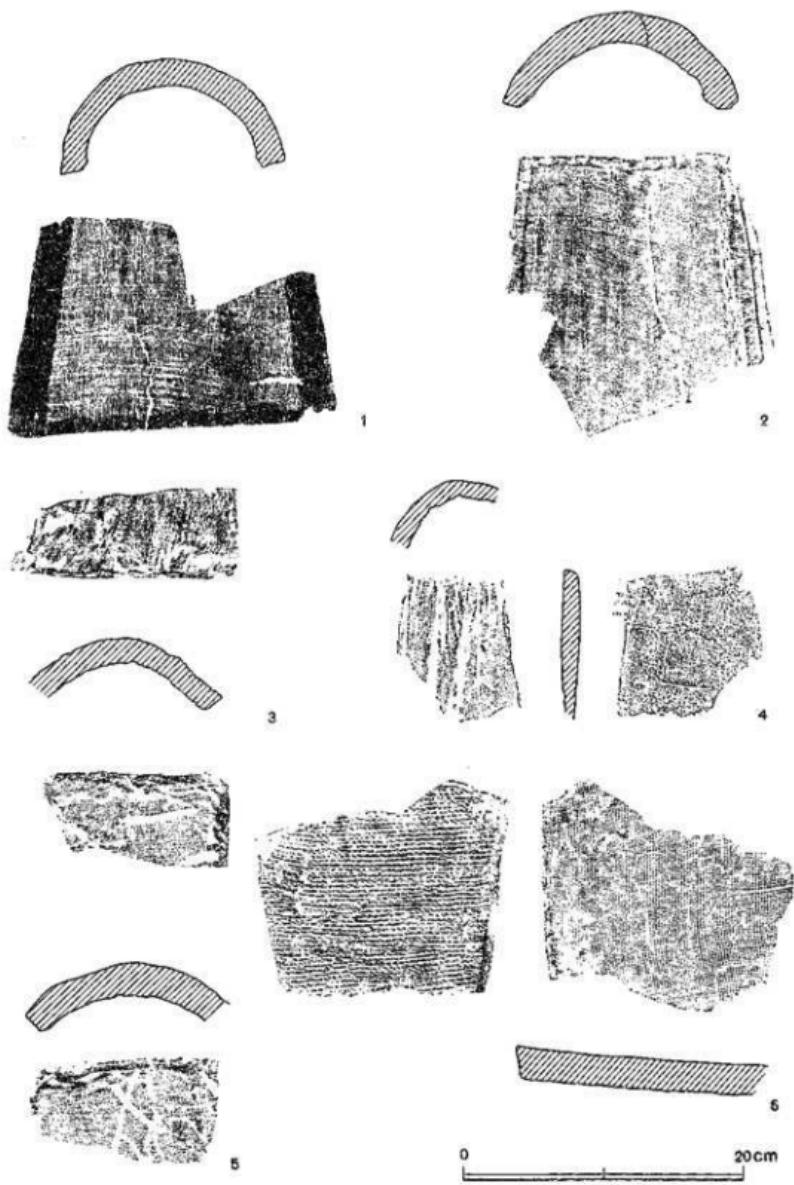
年代

側ヶ谷戸遺跡出土の瓦には、「足」の刻印された郡名瓦が出土している。また、平瓦は、いずれも凸面に縄叩きをもち一枚造りである。年代としては、9世紀前半を考えたい。

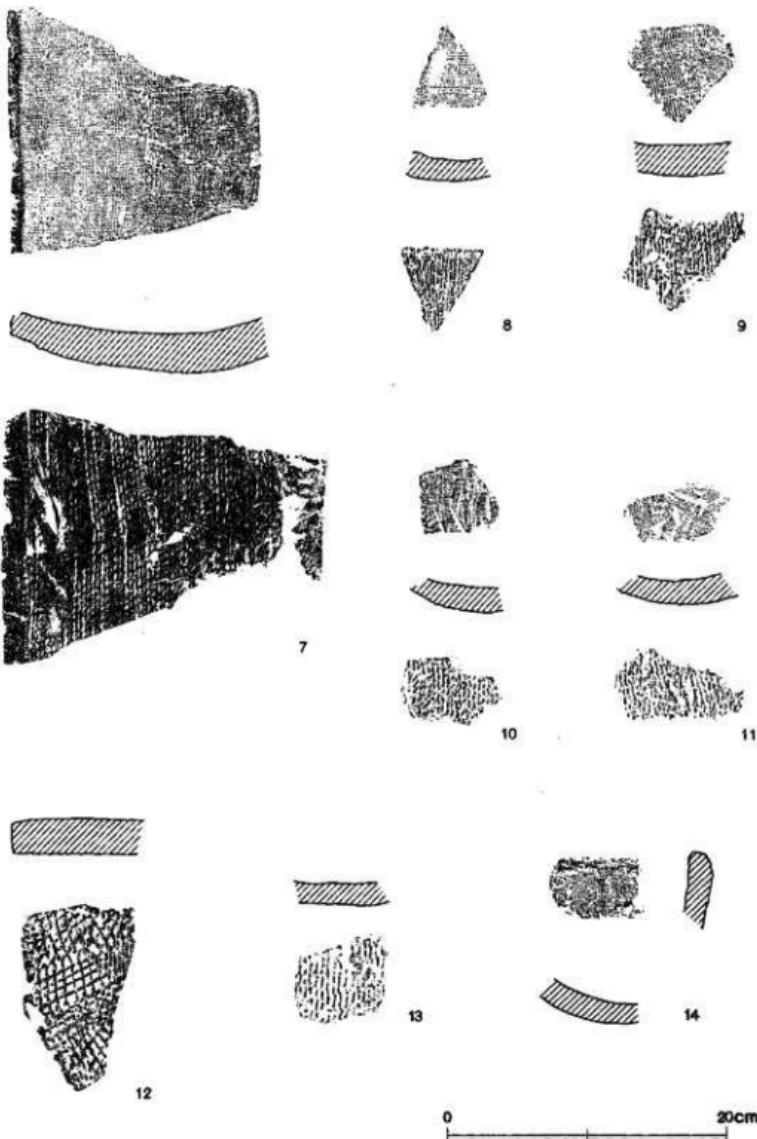
宿宮前遺跡

立地と環境

宿宮前遺跡は、鴨川右岸の自然堤防上に位置し、標高は8mである。大久保領家廃寺の北西にあたり、西側の低地には大久保条里が広がっている。遺跡は鬼高期の集落跡として知られていたが、調査の結果、国分期の住居跡が検出され、包含層からは多くの丸瓦・平瓦の小破片が出土している。



第34図 宿宮前遺跡(1)



第35図 宿宮前遺跡(2)

出土遺物（第34図～第35図）

丸瓦

第1類

1～3・5はいずれも丸瓦小破片である。1は凸面が全面にわたってナデられ、凹面には3cmあたり27本の布目の痕跡を残す。色調は淡赤褐色を呈し、胎土に微砂粒を多量含む。桶巻造り。2は狭端部付近の破片で、凸面は1同様ナデられ、凹面は3cmあたり21本の布目痕を残す。色調は青灰色で、胎土に白色微砂粒含む。桶巻造り。3、5は凸面はいずれも縦方向及び横方向のナデが施され、凹面には3cmあたり24本の布目痕を残す。凹面中央部には粘土紐の巻き上げの痕跡が認められる。色調は3は灰褐色～青灰色、5は青灰色で胎土には砂粒、白色微砂粒含む。

第2類

4は狭端部付近の破片である。凸面は繩叩き後、縦方向及び横方向のナデによってナデ消されている。凹面は3cmあたり21本の布目痕を残す。また布のとじ合せ目が認められる。色調は暗青灰色で胎土に長石、白色微粒子含む。桶巻造り。

平瓦

第1類

6～11、13はいずれも小破片である。凸面には繩叩きが施され、凹面には3cmあたり18本～21本の布目痕を残す（1は横方向の繩叩き）。色調は淡褐色～暗青灰色で、胎土に砂粒、長石などを含み緻密である。

第2類

12は凸面に斜格子の叩きを施し、凸面は全面にわたってナデが施される。色調は淡青灰色で、胎土に砂粒含み軟質である。

第3類

14は凹面に3cmあたり21本の布目痕を残す。凸面磨滅し不明。色調は黒灰色。胎土に長石、砂粒含む。

年代

宿宮前遺跡出土の瓦は平瓦、丸瓦で占められ、遺構にともなうものが少なく、時期を決める材料に乏しい。平瓦の12を除いては丸瓦、平瓦とも新しい様相を示しており、住居跡等の出土遺物と大差ない時期の9世紀前半頃が考えられる。

観音寺遺跡

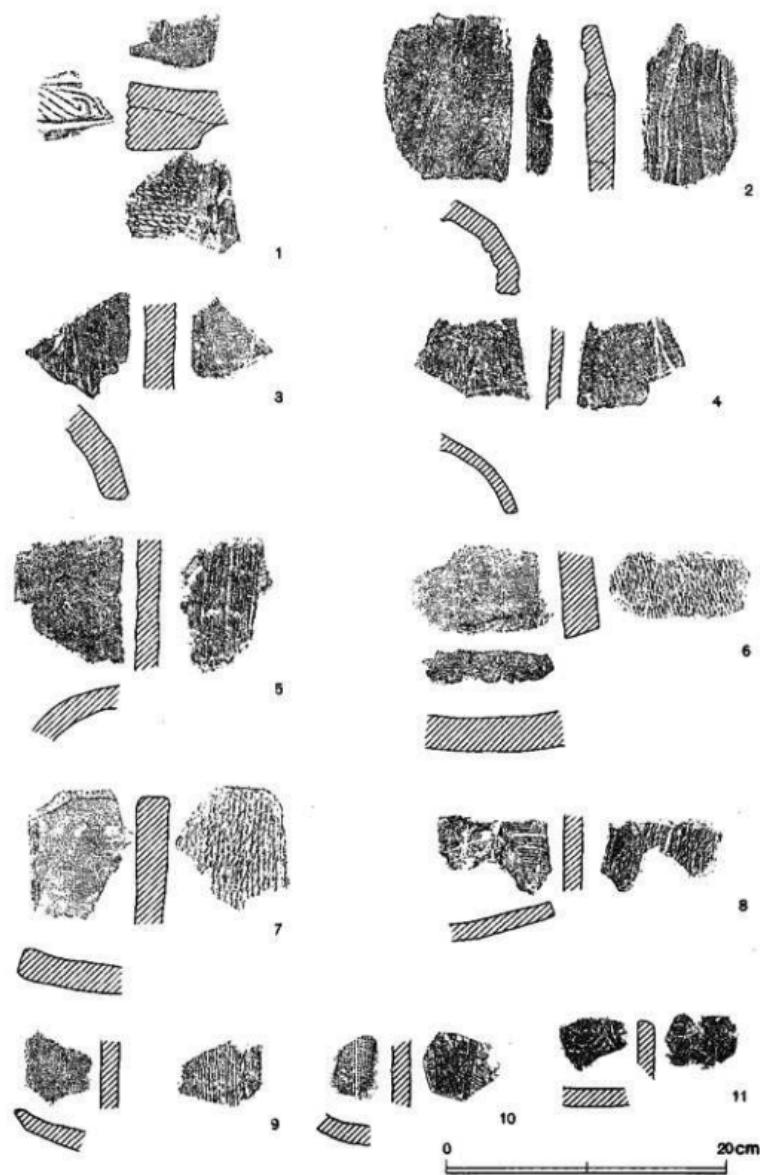
立地と環境

観音寺遺跡は、鴨川左岸の自然堤防上に位置し、宿宮前遺跡の北東約100mの所にある。出土瓦はいずれも境内において表面採集されたものである。

出土遺物（第36図）

軒丸瓦

扁行唐草文軒丸瓦の小破片である。子葉の巻き込みはほとんどなく、主葉と子葉の表現もやや後出的な様相を呈している。段頭の頭部には繩叩きが施され、平瓦部との接合には横方向のナデ調整



第36図 銀音寺遺跡

が行なわれている。凹面には3cmあたり24本の布目痕を残す。また、瓦当部と凹面広端部にはナデは施されていない。色調は暗青灰色で、胎土は緻密で白色粒子多量含む。

丸瓦

第1類

2～4はいずれも小破片である。2は狭端部の破片であり部分的に横ナデが認められるが、他に縦方向にナデが施される。凹面の布目は端部に向って寄っており、3cmあたり21本である。3、4は凸面を繩叩き後ナデ消している。凹面は3cmあたり21本の布目痕を残す。色調は青灰色～暗青灰色で胎土に白色及び黒色粒子含む。

5は凸面凹面ともナデ調整されている。凹面は縦方向のナデによって布目を磨消している。色調は暗青灰色、胎土には黒色及び白色粒子含む。

平瓦

第1類

6～9は凸面に繩叩きを施し、凹面には3cmあたり21本の布目痕を残す。7は端部隅がヘラで切落されるが、四隅が切落されている可能性がある。8は凹面に粘土塊から切りはなしした糸切り痕が、明瞭に残っている。色調は青灰色～暗青灰色、胎土には白色粒子を含み、焼成は良好である。

第2類

10は凸面に大型の正格子の叩き、凹面には3cmあたり18本のやや粗い布目痕を残す。色調は青灰色、胎土に黒色、白色、透明粒子含む。軟質。11は凸面は磨滅が著しく不明であるが、凹面にはやや粗い青海波文風の叩きが施される。色調は青灰色を呈し、胎土に黒色、白色、透明粒子含む。軟質。

年代

観音寺出土瓦は特に平瓦、丸瓦に宿遺跡出土瓦に類似性が認められる。発掘調査が進んでいない現状では不明な点が多いが、2次的に宿遺跡から運ばれたものと考えられている。出土瓦の年代については軒丸瓦も後出的な様相を示していることから、宿宮前遺跡と同時期と考え8世紀末～9世紀前半頃としたい。

大泉院遺跡

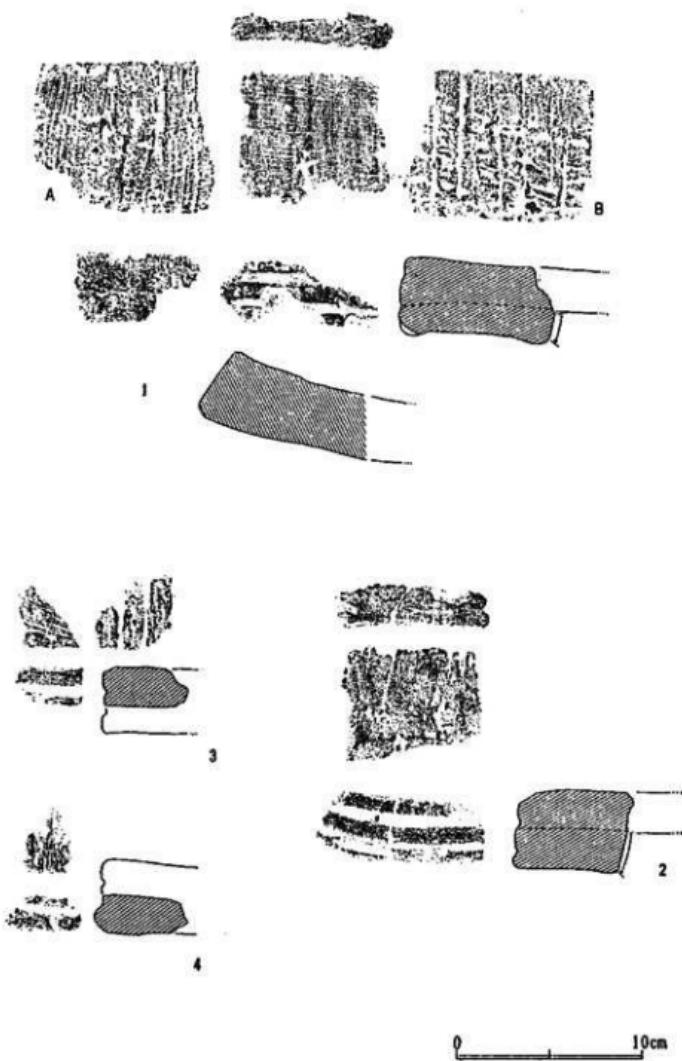
立地と環境

大泉院は、浦和市大字大久保領家363番地に所在し、京浜東北線北浦和駅より西方約4km、鴨川左岸より約160mに位置する。

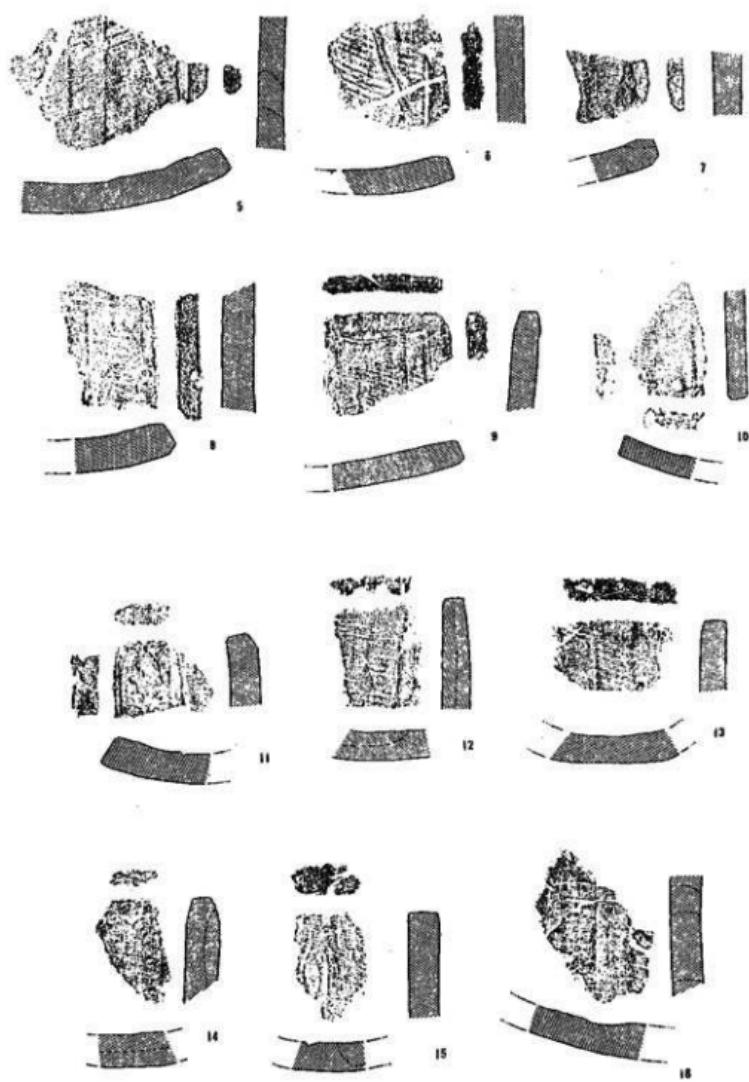
地形的には、荒川によって形成された自然堤防上に立地し、標高は7.8mを測る。

現在、北側は道路を挟んで大久保東小学校校庭となっており、かつて田畠であった周辺は、宅地化が進行している状況にある。また、近い将来、鴨川の河川改修が行われる計画もある。

付近の遺跡には、大久保古墳群(塚山古墳、白銀塚山古墳、かね山古墳、神明寺山古墳等)、本村遺跡(弥生時代中期～古墳時代後期)、大久保領家道場寺院跡(奈良～平安時代)、古貝戸遺跡(古墳時代前期～後期、平安時代)、宿遺跡(平安時代)などの遺跡がある。



第37図 大泉院遺跡(1)



第38図 大泉院遺跡(2)

出土遺物（第37～39回）

大泉院境内より採集された資料は、布目瓦50余片、須恵器小破片、土師器碎片陶器片であったが、そのうち布目瓦22片をここに紹介する。なお、資料採集に際し、大泉院住職の高橋周三氏、堀江清隆・須之部大の両学兄、笹瀬智、奥村恭史両学友の協力を得た。

軒平瓦

1、2は三重弧文軒平瓦である。ともに二条の整然たる沈線により三重弧を描出している。

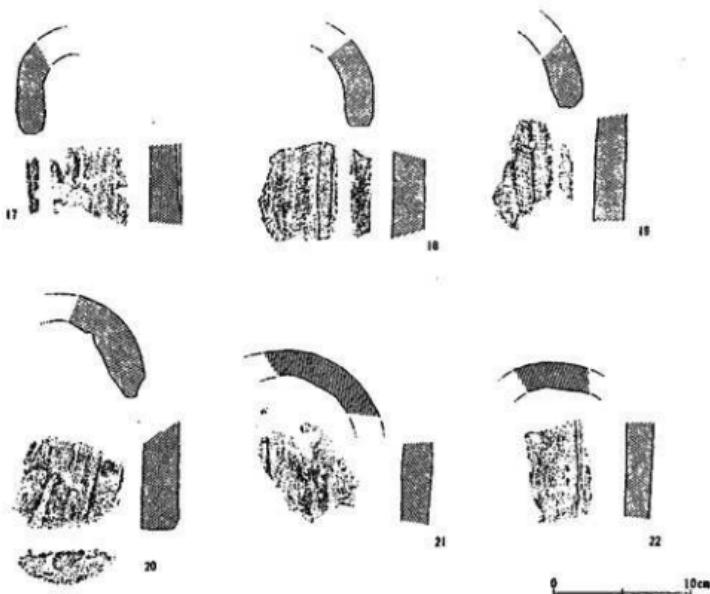
1は成形時に付加した頸部の接合部分で、平瓦部・頸部に分かれしており、瓦当面には頸部に二弧、平瓦部に一弧を残す。面厚約39mm、頸深約82mmを測る深頸である。内弧面には布目が残されており、3cmあたり34×36である。また、模骨痕も認められる。外弧面は瓦当面と平行にナデ整形されているが、剥落・凸凹が著しい。側端部はヘラミガキがなされ、面取りが行なわれている。外弧面と側端面の接する角度は約90度である。頸端部は幅約20mmを測り、ヨコナデされている。外弧面に対する角度は約100度である。頸部接合面（A）には、瓦当面とほぼ垂直方向に細かく浅い条線が施されており、平瓦部接合面（B）は、瓦当面と平行に深さ約1mm、幅約16mm間隔の沈線が施された後、それと垂直方向に約15mm間隔の沈線が施されている。胎土には石英粒・白色粒を多量に含み、色調は器面が暗青灰色、断口は青灰色を呈する。

2は、面厚35～37mm、頸深60mmを測り、深頸を呈する軒平瓦である。内弧面には布目がみられるが、一部磨消されており、端部はヘラミガキによる面取りが行なわれている。外弧面はヨコナデ整形されている。頸端部は幅約22mmを測り、ヘラによる整形が施されている。外弧面に対する頸端面の角度は約100度を測る。重弧文は接合部を境に、上部に一弧、下部に二弧が施文されている。胎土の所見は1と同様であり、色調は青灰色を呈する。

3、4は重弧文軒平瓦であり、ともに接合部分で剥落している。3は接合部より上部の平瓦部であり、二弧を残している。二弧を描出する沈線にはヘラ調整による擦痕がみられる。内弧面は整形により布目が磨消され、ヘラミガキによる面取りがなされている。接合部には約14mm間隔の沈線がみられる。胎土に石英・白色粒・黒色の小石等を含み、色調は接合面が青灰色、器面は暗青灰色を呈する。4は付加された頸部の破片であり、瓦当面に一弧を残すのみである。接合部には瓦当面と垂直方向に擦痕がみられる。胎土には石英粒・白色粒を含み、青灰色を呈する。

平瓦

5は内弧面に模骨痕・輪積み痕を明瞭に残している。模骨痕の幅は約25mmを測る。布目は3cmあたり27×30本である。側端部はヘラ整形され面取りが行われており、内弧面にも整形を行っている。胎土に石英粒・白色粒を含み、青灰色を呈する。6は内弧面を櫛齒状工具？を用いて整形しており、布目及び模骨痕の一部が磨消されている。また、布の縫合による溝が二本確認される。側端部はヘラによる調整が施され、側縁の表面は面取りされている。胎土に石英粒及び白色粒・小石を含み、色調は暗青灰色を呈する。7は糸切り痕と粘土板接合部がみられ、糸切り痕は接合部の中へと続いている。側端部は面取りされており、布目は3cmあたり27×30本である。厚さ約21mmを測り、胎土に石英・白色粒を含む。色調は暗青灰色を呈する。8は、模骨痕・粘土板糸切り痕を残しており、3cmあたり29×35本である。器厚は約26mmを測り、多量の石英粒及び白色粒を微量に含



第39図 大泉院遺跡(3)

む。色調は明青灰色を呈している。9は、内弧面に糸切り痕・横骨痕がみられるが、一部ナデ整形されている。端縁と平行に溝がみられるが、何如なるものか判然としない。外弧面は端縁から約18mmの部分で段になっている。胎土に石英・白色粒、小石を含み、一部に自然釉がみられる。色調は黒色乃至暗青灰色を呈する。10は、内弧面に横骨痕を残している。端部の整形は粗雑である。器厚は約15mmと、他の瓦に比して薄い仕上がりである。胎土に石英・白色粒、小石等を含み、色調は青灰色を呈する。11は、狭端面、側端面ともに面取りが行われており、内弧面には布の縫合による溝が残され、布目はナデ整形により磨消されている。胎土に石英・白色粒を多量に含み、色調は青灰色乃至暗青灰色を呈する。12は、内弧面に横骨痕・糸切り痕を残し、3cmあたり18×18本と、他の瓦に比して少ない本数である。断口には粘土板接合の痕跡がみられる。端部は剝落が著しく、整形等は不明である。胎土に石英粒・白色粒を多量に含み、暗青灰色を呈する。13は、幅約24mmの横骨痕がみられ、端縁（狭端？）はヘラミガキがなされ、面取りされている。焼成は酸化焰であるが良好で、胎土に石英粒・赤褐色粒（鉱物質）を含み、によい橙色を呈する。14は、内弧面に糸切り痕が残されているが、縦方向にナデが加えられており、端縁はヘラミガキによる面取りが行われている。断口には粘土板の接合部が観察される。胎土に石英・白色粒を含み、青灰色を呈する。15は、布の縫合部がみられるが、ナデを加えて整形している。又、横骨痕の一部もみられる。胎土・色調の所見は14と同様である。16は、横骨痕・輪積み痕が観察される。胎土には、比較的大粒の石英及

び白色粒が含まれており、青灰色を呈する。なお、二次的な焼成を受けているようである。

丸瓦

17は、内面に布目の縫合部がみられ、側端部はヘラにより面取りされている。胎土に石英粒・白色粒・赤色鉱物を含み、表面は青灰色、断口は、にぶい橙色を呈する。18は、内面に糸切り痕を残し、端部は丁寧に整形されている。表面には自然釉が付着しており光沢を帯びる。胎土に石英粒・白色粒を含み、黒色乃至青灰色を呈する。19は、内面に糸切り痕を残し、継方向にナデが加えられており、端部整形も丁寧である。胎土に石英粒・白色粒を含み、青灰色を呈する。20は、狭端面を残すものである。内面には、紐圧痕らしき痕跡が残されており、指頭の圧痕がみられる。狭端部と側端部のなす角が、やや広いものである。胎土に多量の石英粒・白色粒を含み、色調は明青灰色を呈する。21は、内面に布目を残すが、継方向にナデが加えられている。胎土・色調の所見は19と同様である。22は、内面の布目がヘラにより磨消され、一部にヘラ跡を残している。焼成は酸化焰によるものと思われ、胎土には、石英・白色粒・赤色鉱物を含む。色調は内面がにぶい褐色、外側が赤褐色を呈する。

年代

大泉院境内からは、三重弧文軒平瓦が出土している。凹面には、模骨痕がみられ桶巻造りと考えられる。また、大久保領家庵寺出土の軒平瓦と比較して彫り込みがやや浅いものの同じ様なつくりである。平・丸瓦も凹面に模骨痕跡が見られる。年代は、大久保領家庵寺と同一時期の8世紀第2四半期が考えられる。

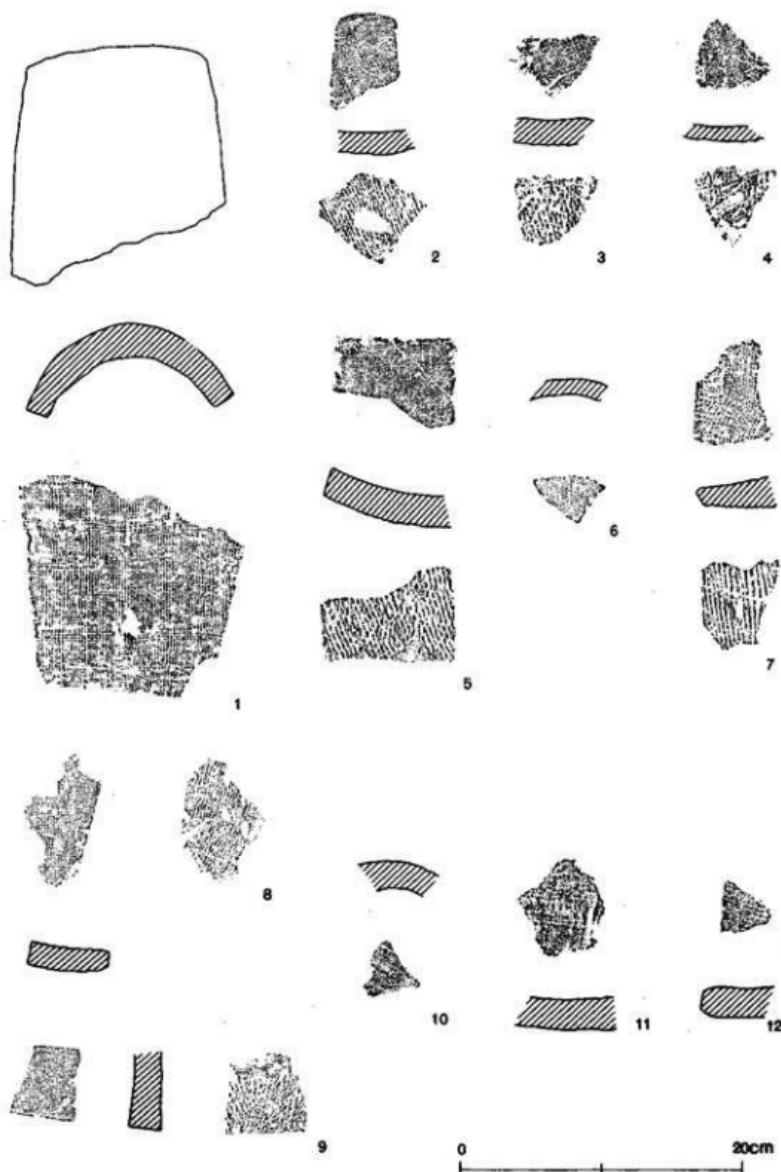
この資料は、小宮山克己氏が『浦和考古学会研究調査報告』第10集に掲載した「大泉院境内探集の布目瓦に就いて」から出土遺物の事実記載を引用させて頂き、ならびに、浦和考古学会にも、多大な便宜をおはかりいただいた。

椿山遺跡

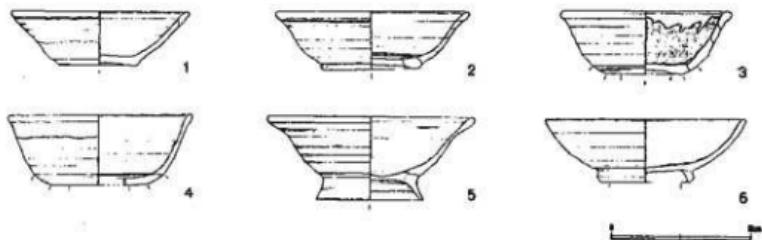
立地と環境

椿山遺跡は、蓮田市大字黑浜字椿山2789-1に所在する。遺跡は大宮台地白岡支台上に立地する。遺跡の南側には元荒川が東流しており、対岸は蓮田支台となる。調査は蓮田市庁舎の建設に伴って蓮田市教育委員会によって行なわれている。現在調査中のため詳明は報告書の刊行を待つことになるが、主体は平安時代の集落跡である。住居跡が約60軒で製鉄に関係した遺跡とみられる。その他に古墳跡6基、縄文時代の住居跡15軒などが検出されている。(註1)

周辺の遺跡は古墳時代後期のものに限ってみると数は少ない。古墳では十三塚古墳が早くから知られていた唯一のものである。凝灰岩質砂岩の切石を用いた胴張の横穴式石室で、直刀、刀子、鉄鎌、滑石製勾玉などが検出されている。埴輪は持たず前庭部から須恵器長頸壺と壺が発見されている(埼玉県、1982)。その後、国道122号バイパスの調査によって、さらなる遺跡から3基の円墳が検出された。大きさは周囲の外径が25m前後である。このうちの1基は凝灰岩質砂岩の切石を用いた長方形の横穴式石室で片袖形になると考えられている。鉄刀、鉄鎌、刀子、耳環などが検出されている。これらの古墳の年代はおよそ7世紀前半に考えられている(藤原高志、1983)。集落もきわめて少ない。古墳時代後期の集落については現在のところ未報告であるが、国道122号線バイパス工



第40図 椿山遺跡(1)・天神山遺跡(2～6)・南原遺跡(7)
三ツ和遺跡(8～9)・本村遺跡(10～12)



第41図 天神山遺跡出土遺物

事に伴なう調査で検出されている(註2)。その他、若干の遺物の表探資料によってその存在が予想されているのみである。奈良時代以降になるとわずかながら遺跡が知られている。荒川附遺跡、御林遺跡、御殿場遺跡などである。荒川附遺跡は4次調査まで行なわれており、7軒の住居跡が確認されている(野中松夫、1981、1983、大塚孝司、1984)。御林遺跡は昭和45年に東北自動車道の建設に伴い調査された。3軒の住居跡が検出されている。ここでは特に鉄滓が多い量に検出されている。御殿場遺跡は椿山遺跡の東北線を挟んだ東側で実質的には椿山遺跡の一部と考えられる。住居跡が1軒検出されている。

(註1) 蓼田市教育委員会、大塚孝司氏の御教示による。

(註2) 調査はS58年に埼玉県埋蔵文化財調査事業団によって行なわれた。未報告。

出土遺物(第40図1)

瓦はすべて小破片で、丸瓦及び平瓦の破片が数点出土している。図示したものは丸瓦1点のみである。凸面はヘラケズリの後、全面をナデている。一部ヘラ痕跡が残る。凹面は布目痕と模骨痕が6本残る。布目は3cmあたり22×15本である。模骨痕の幅は2.4cm～3.0cmである。狭端面は斜方向にヘラケズリされる。側端面はヘラケズリされた後にからくナデされる。厚さは1.7cm～2.5cmである。胎土は長石、石英、黒色粒子、スコリアを含み褐色。焼成軟質。

天神山遺跡

立地と環境

天神山遺跡は、川口市大字赤井台に所在し、地形的には鳩ヶ谷支台南部の洪積台地上に位置する。この洪積台地が旧入間川によって形成された沖積低地に対して開析する支谷の最奥部上にあたる。標高は16mを測る。沖積地との比高差は約11mである。発掘調査の結果、平安時代の堅穴住居跡1軒が検出された。この堅穴住居跡は不定形プランを呈し、2ヶ所に炉をもつ特異なものである。また、出土遺物は多数の須恵器・土師器等の土器類と、手斧・鎌・釘等の金属製品にまじって布目瓦が出土している。

出土遺物(第40図2～6)

平瓦

2～5は、いずれも平瓦の小破片である。2は、厚さ1.6cm、長さ5.9cm、幅5.5cmを測る。凸面には、3cmあたり6×13本の繩叩きを施す。凹面には、3cmあたり24×20本の布目痕を残す。色調は

灰褐色。胎土は赤色粒子、白色粒子を含み粘性を持つ。3は、厚さ1.7cm、長さ4.3cm、幅4.6cmを測る。凸面には、3cmあたり4×9本の縄叩きを施す。凹面には、3cmあたり22×18本の布目痕を残す。色調は黄褐色。胎土は赤色粒子、小石を混入させる。4は、厚さ1.0cm、長さ5.2cm、幅5.7cmを測る。凸面には、3cmあたり4×9本の縄叩きを施す。凹面には3cmあたり20×21本の布目痕を残す。色調は黒褐色。胎土は白色粒子、砂粒子を含む。5は、厚さ2.3cm、長さ6.8cm、幅9.5cmを測る。凸面には、3cmあたり4×9本の縄叩きを施す。凹面には、3cmあたり22×28本の布目痕を残す。色調は、灰褐色。胎土は赤色粒子。白色粒子を含み若干の小石を混入させる。

丸瓦

6は、丸瓦の小破片である。厚さ1.1cm、長さ5.0cm、幅4.1cmを測る。凸面には、ナデ調整を施す。凹面には3cmあたり縦21×横23本の布目痕を残す。色調は灰褐色。胎土は赤色粒子、白色粒子を含み小石を若干混入させる。

土器（第41図）

須恵器

1は、やや上げ底ぎみの底から外傾に直線的に立ち上がり口縁に至る器形を呈する。口縁部には一条の沈線がみとめられる。体部外面には、横ナデの後指頭による不定方向のナデが施される。また、指頭による押さえにより高台風の凸部を形成する。焼成は良好。胎土は細砂粒を含み灰褐色を呈する。2は、1と同様の形態を呈し口縁部でやや外反する。焼成は良好で比較的堅緻な器質を呈し、胎土は細鉱物粒を含み淡褐色を呈する。3は、ロクロ水挽き成形で体部下端を幅1cm前後の回転ヘラケズリが施される。底部は中央に糸切り痕を残し、外周を右回り6回で一周する手持ちのヘラケズリが施される。内面には、赤紫色の鉄滓状の物質が付着している。焼成は良好で堅緻な器質。胎土は細鉱物粒を含み淡褐色を呈する。4は、ロクロ水挽き成形で体部下端を幅1cm前後の回転ヘラケズリが施される。底部は、外周回転ヘラケズリを施す。焼成は良好で、色調は褐色を呈している。

5は、高台付坏である。2cm程の貼付高台を有し、大きく外反し口縁部に至る器形を呈する。体部は、ロクロ水挽き成形により器肉も比較的薄い。色調は橙褐色。胎土は細鉱物粒を含み精選されている。

灰釉陶器

6は、底部から緩やかに内溝ぎみに立ち上がり口縁部に至る器形を有する。高台は、断面三日月状の付高台で、高台脇にはロクロ使用の丁寧なヨコナデ、底部裏には回転ヘラケズリおよび、ナデ調整が施されている。灰釉は、付け掛けによるもので、外面は腰部付近、内面は体部下位まで施釉されている。胎土は灰色を呈し、ざらついた土を用いている。

本村遺跡

立地と環境

本村遺跡は鶴川左岸の自然堤防上に位置し、大久保領家庵寺の南300mに立地している。この付近の自然堤防は標高7～8mで水田面との比高差は約1mである。

本村遺跡は2度にわたって調査が実施され、溝が多く検出されている。出土瓦は大久保領家庵寺

から2次的に運ばれたものと考えられている。

出土遺物（第40図10～12）

丸瓦

10は丸瓦の小破片である。凸面にはナデ、凹面には3cmあたり30本の布目痕を残す。色調は灰色、胎土に砂粒を多く含む。11・12は平瓦の小破片である。いずれも凸面はナデ、凹面には3cmあたり27本の布目痕を残し、12の側端面は面取りがされている。

年代

出土瓦は大久保領家庵寺から2次的に運ばれたものとされているが、大久保領家庵寺に類例の出土瓦はなく、断定は難しい。大久保領家庵寺の北側に位置する大泉院境内出土瓦には、凸面をナデ消した平瓦や、大久保領家庵寺と同範と考えられる軒平瓦も出土しており、いずれかの遺跡から移動したものと考えられる。瓦の年代については2つの遺跡から8世紀代としたい。

三ツ和遺跡

立地と環境

三ツ和遺跡は、鳩ヶ谷市大字三ツ和の細沼地に所在する。遺跡は、市域の東南部に位置し、鳩ヶ谷支台南端から500m離れた地点に、旧入間川によって発達した南北に長い自然堤防上に立地している。標高は4～5mを測り流路跡との比高差は1～2mである。西には川口・蕨・戸田の低地へと続く荒川低地が広がっている。三ツ和遺跡は、弥生時代後期・古墳時代前期・平安時代・中世の低地性複合遺跡である。周辺には、仙元祠古墳や高稲荷古墳が主墳と考えられている新郷古墳群が形成されている。

出土遺物（第40図8・9）

瓦は、第6次発掘調査において平瓦2片が出土した。8は、厚さ1.7cm、幅5.8cm、長さ10.3cmを測る。凹面には3cmあたり18×18本の布目痕が残されている。凸面には3cmあたり5×13本のかなり細かい繩叩きを施し先端部を幅0.7cm程へラケズリしている。右側面がわずかに残存しておりヘラケズリがみられる。左側面は、二次的に調整されたもので鋭さを欠いたヘラケズリ、もしくは擦りつけて器面を平滑にした状態である。色調は青灰色。胎土は砂粒子、白色粒子、雲母片をふくむ。焼成や良好。9は、厚さ2.3cm、幅5.7cm、長さ5.6cmを測る。凹面には3cmあたり22×23本の布目痕が残されている。凸面には3cmあたり6.5×9本の繩叩きを施す。広端面は、厚さ2.3cmを測りヘラケズリの後指ナデを加えている。色調は灰色。胎土は石英、長石、雲母片の他、砂粒子をやや多く含み、白色針状物質を含む。焼成良好。

年代

9は、胎土中に白色針状物質を含んでおり南比企窯跡群の瓦である。年代は、9世紀前半が考えられる。

南原遺跡

立地と環境

南原遺跡は、戸田市南町に所在する。旧入間川（現荒川）の流路に並行して発達した東西に伸びる細長い微高地の北側に位置する。標高は約5mを測り、平坦な戸田市にあっても比較的起伏のあ

る地形をしている。現在の荒川は、南原遺跡の南方約500mを東流している。周辺には、平安時代の遺物を出土する前谷遺跡が存在する。南原遺跡は、周辺に群集する南原古墳群を含め広範囲にわたる。このうち、南側のA地区では、古墳時代前期の堅穴住居跡及び円形周溝基の一部が検出された。また、A地区の東側にあたるF地区で2基の円形周溝が検出された。瓦は、この円形周溝を切って掘られた溝跡から出土した。

出土遺物（第40図7）

瓦は、溝跡から平瓦の小破片が1片検出された。厚さ2.1cm、幅5.6cm、長さ7.5cmを測る。凸面は、3cmあたり8×7本を施す。凹面は、3cmあたり22×13本の布目痕を残す。側面は、幅1.1cmで広端から狭端方向へのヘラケズリを施し凸面と鋭角をなしている。1枚造りと考えられる。色調は暗灰色。胎上は砂粒子、細かい白色不透明粒子を多く含み、粘性も緻密である。

年代

平瓦の小破片が1片であるためやや明確ではないが、側端は鋭角をつくり粘土の厚みがうすくなっている。また、凸面に、繩叩きを施している点で9世紀前半を考えたい。

引用・参考文献

- 青木義脩・高山清司（1984）「本村I遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査報告書第39集
青木義脩・高山清司（1984）「宿宮前遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査報告書第40集
浅野信英（1984）「鳩ヶ谷市三ツ和遺跡」鳩ヶ谷市埋蔵文化財調査報告書第3集
大川 清（1958）「武藏国分寺古瓦塙文字考」早稲田大学考古学研究室報告第5冊
大宮市（1970）「奈良瀬戸遺跡」『大宮市史』第1巻
小川順一郎（1985）「天神山・宮脇遺跡」川口市遺跡調査会報告書第6集
野部徳秋（1973）「岩の上・焼子山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第1集
小宮山克巳（1982）「大泉院境内採集の布目瓦に就いて」浦和考古学会研究調査報告書第10集
行田市（1963）『行田市史』
埼玉県（1984）『埼玉県史』資料編3古代1奈良・平安
酒井清治（1982）『綠山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第19集
酒井清治（1986）「北武藏における7・8世紀の須恵器の系譜について」埼玉県立歴史資料館『研究紀要』
第8号
酒井清治（1987）「窯・郡寺・郡家一勝呂庵寺の歴史的背景の検討…」「埼玉の考古学」新人物往来社
塩野 博他（1972）「鹿島古墳群」埼玉県教育委員会
塩野 博（1986）「荒川下流域における墓制の変遷」戸田市立郷土博物館研究紀要第1号
瀧瀬芳之（1985）「愛宕通遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第51集
戸田市（1985）「南原遺跡」『戸田市史』資料編一原始・古代・中世
高橋一夫（1982）「古代寺院成立の背景と性格」『埼玉県古代寺院調査報告書』県史編さん室
高橋一夫（1982）「埼玉県古代廐寺跡発掘の現状」『歴史手帳』10 名著出片
高橋 茂（1979）「比企郡滑川村出土の須恵器と布目瓦」『埼玉考古』18号
原鳥礼二（1978）「東松山市とその周辺の古代」東松山市市史編さん調査報告第13集

- 東松山市（1981）「大谷瓦窯跡」「東松山市史」資料編一原始古代・中世
- 藤原高志（1983）「ささら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第24集
- 坂野和信（1982）「北武藏における古代瓦の変遷」『埼玉県古代寺院調査報告書』県史編さん室
- 安岡路洋（1973）「台耕地稻荷塚古墳発掘調査報告書」大宮市文化財調査報告第6集
- 柳田敏司（1969）「奈良瀬戸遺跡」大宮市教育委員会

研究紀要 第4号

1988

昭和63年1月25日 印刷

昭和63年1月30日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒331 大宮市郷引町2-499 0486-52-2231

印刷 関東図書株式会社